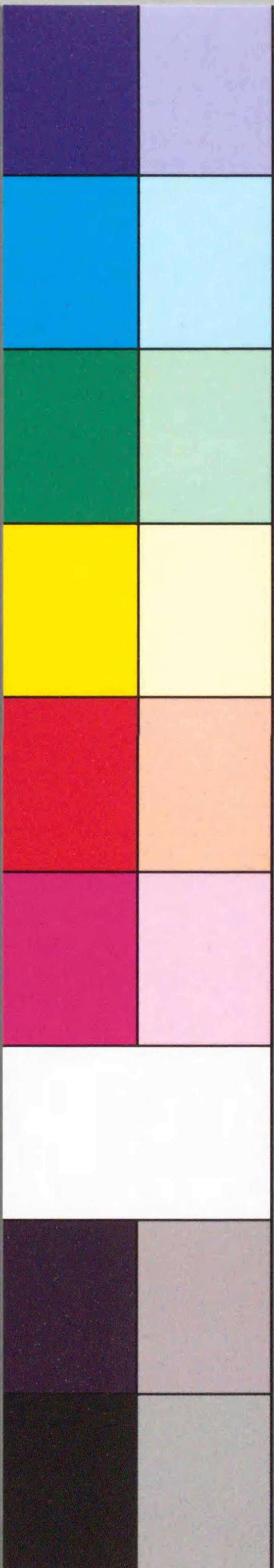


Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

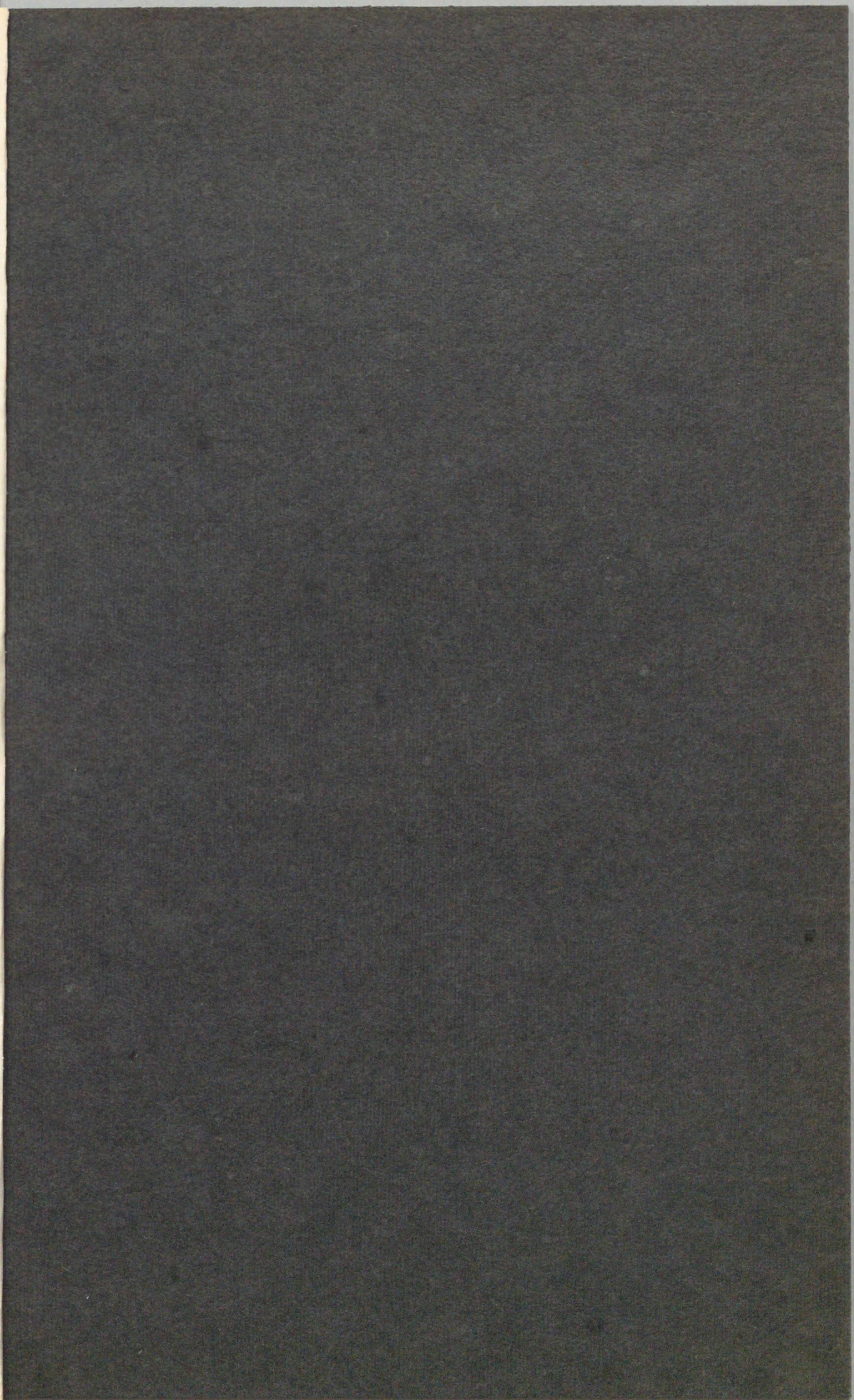
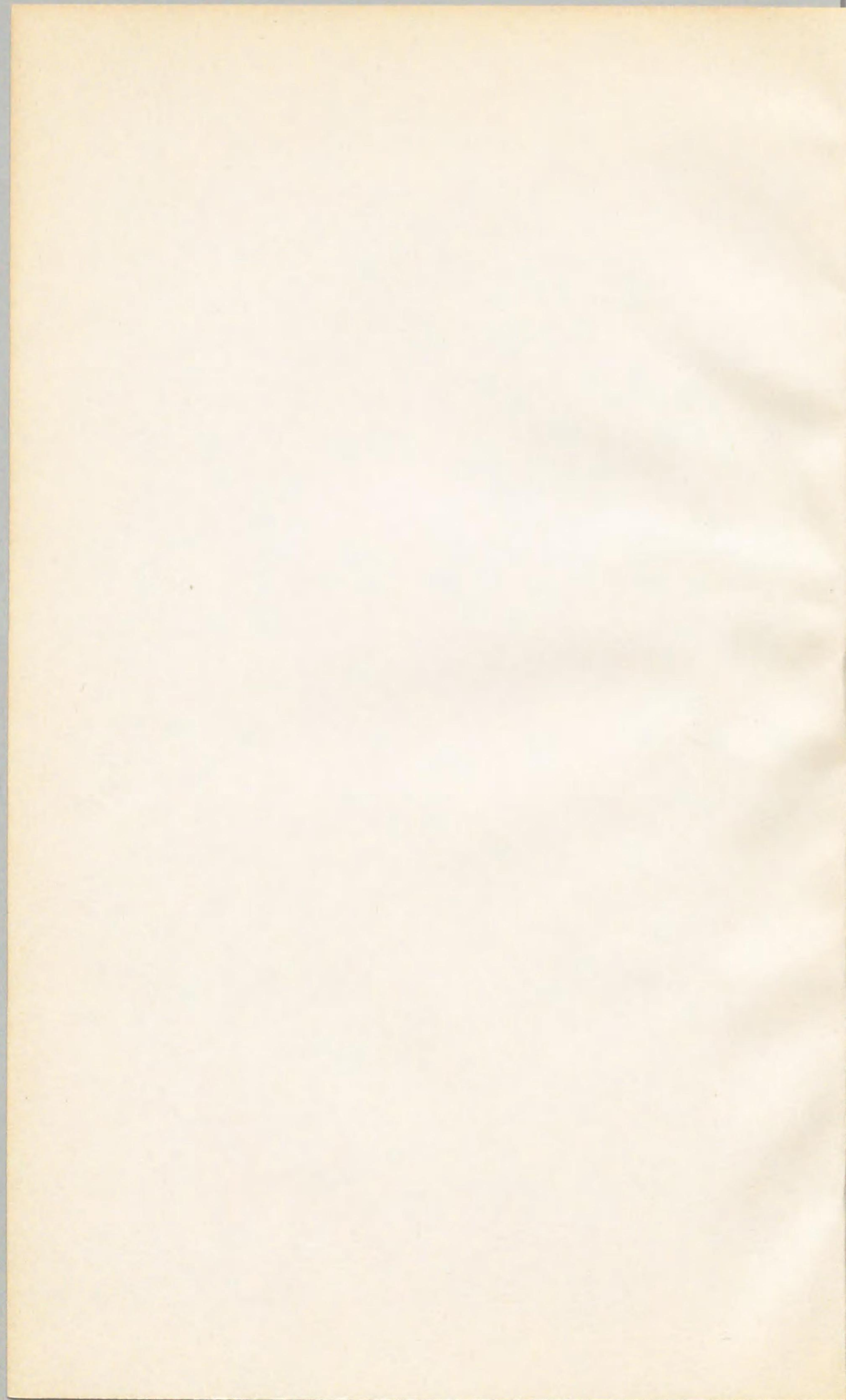
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



特54
656

特54-656
1200500912360

ほまれ
月の巻
国立国会図書館



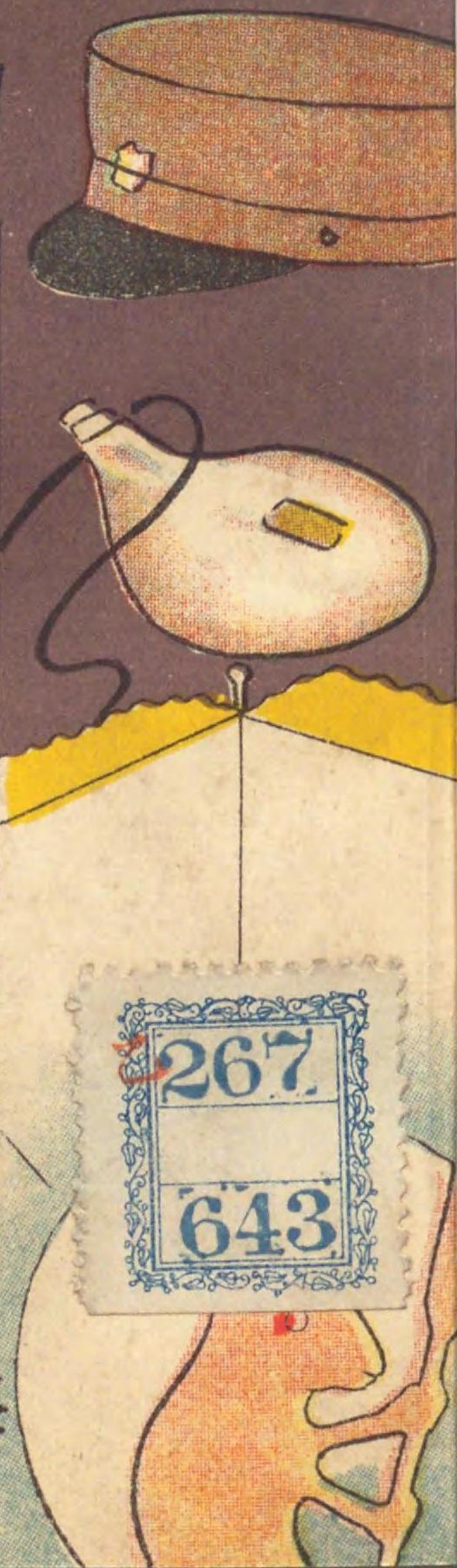
ホマレ

+



賞

月の巻



267
643

京東
社針指海學
行發

特54

656

特45

551



神功皇后新羅に攻め寄せたふ圖

神

はまれ

緒言



一 兒童教育の一方便として、學年末に或は運動會に或は學藝會に或は展覽會に或は平素に於て、賞與品を授け以て兒童を獎勵鼓舞することは、到る處の小學校に於て實行せられ、又大に必要缺くべからざることなりと雖も、未だかつてこれに適切なる資料に接することを得ざるは大に遺憾とする所なり、本書は古來我國に於て榮譽を荷ひたる人物の傳記を簡單に列舉せるを以て、兒童一時の名譽を表彰するのみならず、將來永遠に紀念物として保存し自己は勿論子孫に



至るまで、永久に其の價値を失はざらしめんことに努めしを以て特徴とせり。

二表紙の「しかくにあきし部分」あり、其の處に學校印を押捺して授與し、終りの頁に於ける各欄即ち學校長名、受持訓導名、受賞者の學年及住所氏各及び月日は受賞の後各自に記入すべきことゝなせり。

ほまれ (月の巻)

目次

- 一 學校長の訓話……………一
- 二 素盞鳴尊……………二
- 三 大國主尊……………五
- 四 野見宿禰……………八
- 五 神功皇后……………一一
- 六 仁徳天皇……………一四
- 七 坂上田村麿……………一六
- 八 中將姫……………一九
- 九 渡邊綱……………二二

目次終

- 一〇 平重盛……………二五
- 一一 源頼朝……………二九
- 一二 新田義貞……………三一
- 一三 楠木正行……………三四
- 一四 上杉謙信……………三六
- 一五 菅原道真……………三九
- 一六 徳川家光……………四三
- 一七 紫式部……………四五
- 一八 中江藤樹……………四七
- 一九 日本海の家戦……………五〇
- 二〇 朝鮮併合……………五三

ほまれ 月の巻

一 學校長の訓話

人間一生涯の中には、嬉しいこと面白いことは、數限りなくあり
 まするが、其の嬉しいと云ひ喜ばしいと申す中にも、最も愉快で
 あるのは平素の苦心が成效した時であります。日常心を碎き身
 を苦め、勤勉をなし、忍耐をなし、其の結果出來上つた事の愉快は
 何にも例へ様がないものです。彼の梅の花を御覽なさい。雪には
 怖ぢず、霜にも恐れなひで、百花の魁をしてこそ、人に賞揚せらる
 るではありませんか。諸子が今日此の式場に於て、名譽ある褒賞
 として、紀念物を受けらるゝのも、決して偶然の結果ではござい

ません、これは全く平素の賜物でありますがゆゑに、私は茲に諸子と共に、大に御祝をする次第であります。さて此の賞與品ですが、元來高價なる書物ではありませんが、これを受けらるゝ名譽の價値は決して低いものではありません。而して此の「ほまれ」なる書物は、其名の通り、我が國古來の歴史を飾りました譽ある方々の傳記の粹を列ねたものでありますから、諸子は將來此の紀念物を鑑として、益々品行を慎み、學業を勵み、體力を煉り、以て我が國が世界の一等國たる、名譽に愧ぢないやうに、諸般の點に於て、成效あらんことを希望致します。

二 素盞鳴尊

天照大神様の御弟に、素盞鳴尊と申す御方がありました、高天原

で大層亂暴をなされたゆゑ、姉君様の御怒に觸れて、根の國と申す處に行かれる途中、出雲國簸川上まで來まして、河岸で休んで



居られると、其の河の瀬に箸が流れて参りました、尊は之れを御覽になり、此の河上に住む者があると思召して、尋ねて参りますと、とある家で年寄夫婦が一人の娘を中に置いて切に泣き悲しんで居りますので、尊は不思議に思つて、何故に泣くのかと御訊ねになりますと、老人は私共は以前八人の

娘がありましたが、此の河上の天淵と云ふ所に八頭の大蛇が居りまして、毎年出て来て娘を一人づゝ食べました。今日も又たつた一人残つた娘を食べに来ますによつて歎いて居るので御座いますと、涙ながらに答へました。尊は元より武勇の御方でございますから、心配するな己が退治してやる」と仰せられて直に計略をめぐらし、八つの酒甕に酒を一ぱい入れて、大蛇の来る場所しよに据えて置き、尊は少女の姿すがたに身を扮して、今か今かと待つて居らつしやいました。やがて雲が立ちのぼり霧が起ると見ると、物凄ものすごい音を立て、大蛇が現れ、此方こなたを目がけて進んで参りました。たが、己おのれの好きな御酒の香におほがしますから、娘の事は打ち忘れて、八の頭やつを八の酒甕さけがめにつき入れ、火の様な舌を出して酒を舐め盡し、皆酔つて其處そこに寝てしまひました。尊は之これを見て十握じゆ劍を抜

き放ち、庖丁ばうていで大根だいこんを伐る様に頭かしらから寸断すんたん寸断すんたんに斬りますと、丁度尾ていごの所でカチリカチリと音がして、劍つるぎの刃はが缺かけましたから、割わいて改めて見ますと中に立派りつぱな劍つるぎがありました。之これは世に珍めづらしい品しなでありますから、己おのれの持つべきものでないと思召おぼしめして、早速さつそく天照あまてらす大神みかみに献上けんじやう致いたしました。初め大蛇たいじやの居をつた所ところは、常に五色ごしきの雲くもが漂たふよつて居りましたゆゑ、これを叢雲むらぐも劍つるぎと名づけ後に草薙くさなぎ劍つるぎと改めて、今の熱田あつた神宮じんぐうの御神禮ごしんらいであります。

三 大國主尊

何處どこの家いへにも大概たいがい神棚かみだながあります。その神棚かみだなに大國おほこく様さまを祠まつつてありませう。大きな袋ふくろを肩かたにかけ、打手うちでの小槌こづちを持もつて居らつしやいます。此この大國おほこく様さまは大國主尊おほくにぬしのみことであります。此この御方おかたの御兄弟おきやうだい

は八十神とて大勢でありました。或る時因幡の八上比賣の元へ御客に参るとして出かけました。が何時も他所へ行く時には、此の尊が兄神様方の荷物を袋の中に入れ之を背負つて、一番後から従者をして行くのです。その時尊が氣多崎まで参りますと、海岸の砂原に赤裸になつて泣て居る一匹の兎が居りました。尊は兎に向つて「御前は何故に泣くのか」と訊ねますと、兎は「私は元此の國に住んで居たのですが、以前隱岐島へ渡りましたが、又此所へ歸つて来ようと思ひましたが、其の便りがありませんので、鰐共を欺し御互の種族の數を比べて見ようとして、鰐を其の島から此處まで並べ、私が數をよむとて、其の鰐共の背の上を一つ二つと跳びながら難なくこゝまで渡つて来たのは、良かったのですが、一ばん終に居た鰐に其詐りを見現はされ、體の毛を悉皆むしり

取られました。ゆゑ傷んでたまりませぬ。ゆゑ茲に泣て居ますと、先程大勢の神様が御通りになつて、此の疵を癒すには、海の水で洗つて日向で風通しの宜い所へ行つて寝て居れと、教へて下さいました。ゆゑ、其の通りに致しましたら、尙々傷んでたまりませぬと泣く泣く申しますと、尊は「それは氣の毒なことだ

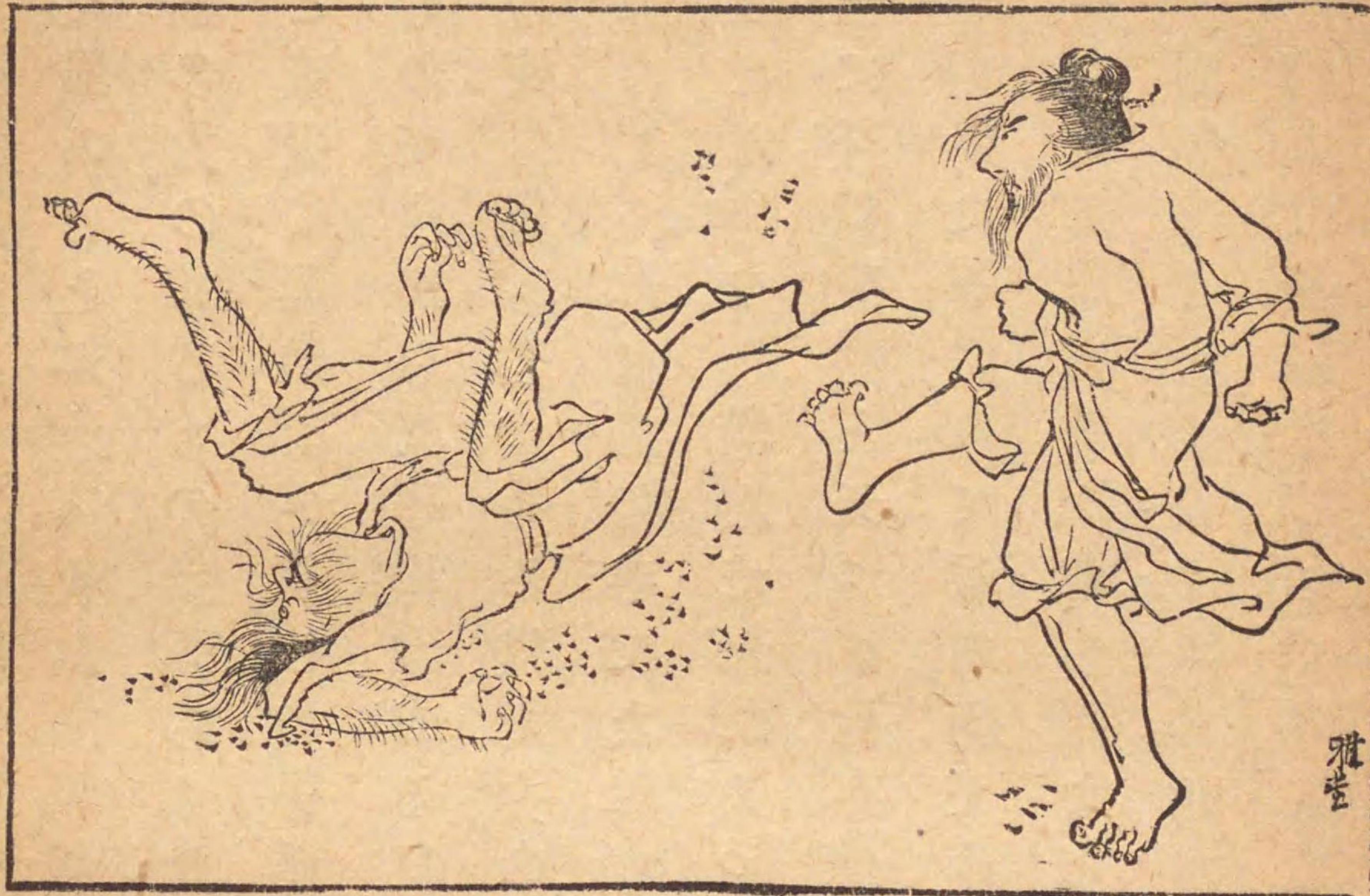


先に行つたのは私の兄様等だが悪い事を教へた、御前は直に向
 の山の麓の清水で好く體の鹽をよく洗ひ落し、蒲黄の穂を敷い
 て其の上に寝るがよいと教へましたゆゑ、兎は其の通りに致し
 ましたら、不思議にも拭いて取たやうに癒つてしまひました。兎
 は大層喜んで「あなたは屹度豪い神様になられます」と云つて御
 禮を申しました。此の尊は兎の云つた通り後に土地を拓き民を
 教へて下さいました。彼の持つて居らるゝ小槌の柄は、長が五尺
 もあつたさうですが、杖について國中を歩かれたものですから
 短くなつたのださうです。

四 野見宿禰

昔垂仁天皇様の御代に當麻蹴速と云つて、其の名の如く力が有

て蹴ることが速い人がありました。平素人に向つて己にかなふ
 程の力のあるものは、恐らく此の廣い日本中に一人もあるまい
 と威張つて亂暴ばかりして居ました。此の事が朝廷にまで聽えた
 ものですから、天子様は或る日御側の者に向つて「彼の力自慢の
 蹴速を懲らしてやる様な力のあるものは無いか」と御問ひにな
 りました。私が相手になりますと申上げる者は一人も御座い
 ません。皆口を噤んで恐れ入つて居りますと一人の家來が「出雲
 國に野見宿禰と云つて、智恵が深く大力な者があります。之れ
 を相手になされては如何です」と申上げました。天子様は「早速そ
 れを呼んで角力を取らせよ」と仰せられました。二人を御所
 へ召出すことゝなりました。さて其の日には天子様を始め朝廷
 の役人は綺羅星の如くに並んで、兩人の角力を御覽になります。



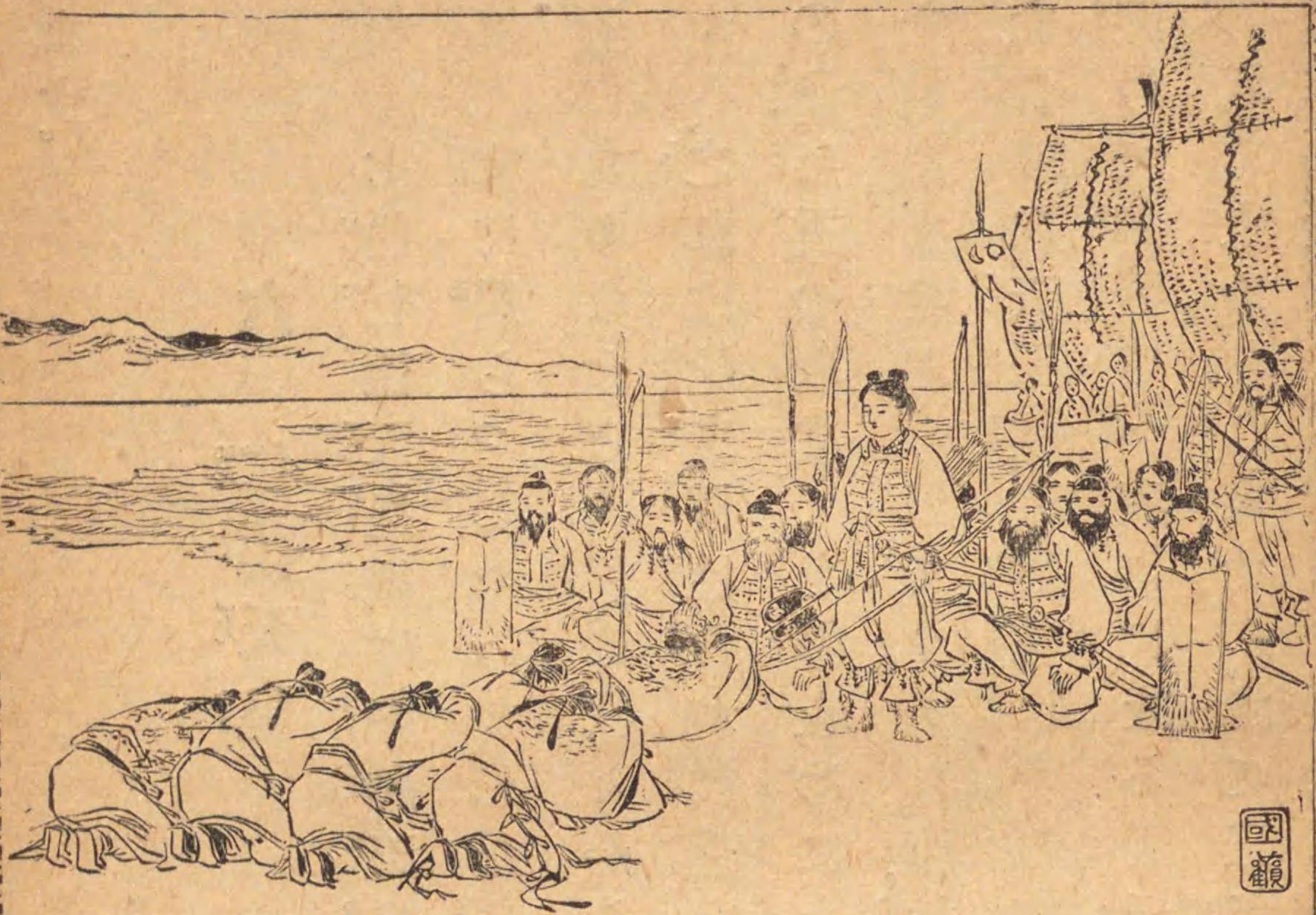
蹴速は宿禰が強いと云つても
 高が知れて居ると幾分か馬鹿
 にしてゐる様でした。が宿禰は
 少しも油断を致しません。雙方
 立上り渾身に力を入れて互に
 押合つて居ました。見物の人々
 は如何なることかと皆手に汗
 を握つて見て居ますと、宿禰が
 エイと一聲かけたかと思つた
 ら、自分の胸より高く蹴速を差
 上げて、ドウと投げつけました
 から、たまりません肋骨を折ら

れウーンと云つて氣息が絶えてしまひました。之れを御覽にな
 った天子様を始め見物の人々は手を拍ち鯨波をあげて褒めは
 やしました。宿禰はこれから朝廷へ仕へることになりました。種
 々と益のあることをなされましたが、其の内でも世の爲め人の
 爲めになつたのは、殉死を禁じたことでもあります。殉死とは其の
 頃人が死にますと、其の人に仕へて居たものは、生きながら穴に
 埋められる風習があつたのを、宿禰は之は能くない事である故、
 其の人や馬の代りに埴輪として、土で拵へた物を埋めて身代りに
 すると宜しからふと天子様に申上げますと、是れは良い考であ
 るとて御採用になり、それから全く殉死を禁じられました。

五 神功皇后

九州の熊襲といふ一族が一度ならず二度三度まで叛きましたゆゑ第十四代仲哀天皇様は神功皇后様と御一緒に御征伐に御出でになりましたが不幸にして陣中で御薨去になりました皇後は御智慧が深い方で居らっしゃいますから其の喪をかくして熊襲の叛くのは畢竟新羅が後押をするからである故に先づ新羅を討つのが良い策略であると思召して早速多くの船を集め男の装をして御進軍になりました新羅とは今の朝鮮のことです其の頃は三韓と申しました。

そこで皇后の御軍は勇ましく海を渡つて敵地へ着かうと致しましたら逆巻く浪が新羅國の中央程まで押寄せて参りましたゆゑ國王を始め國中のものは大に怖れて戦争をする元氣もなく直様皇后の前へ降参をしてどうぞ今迄の罪は御赦し下さい



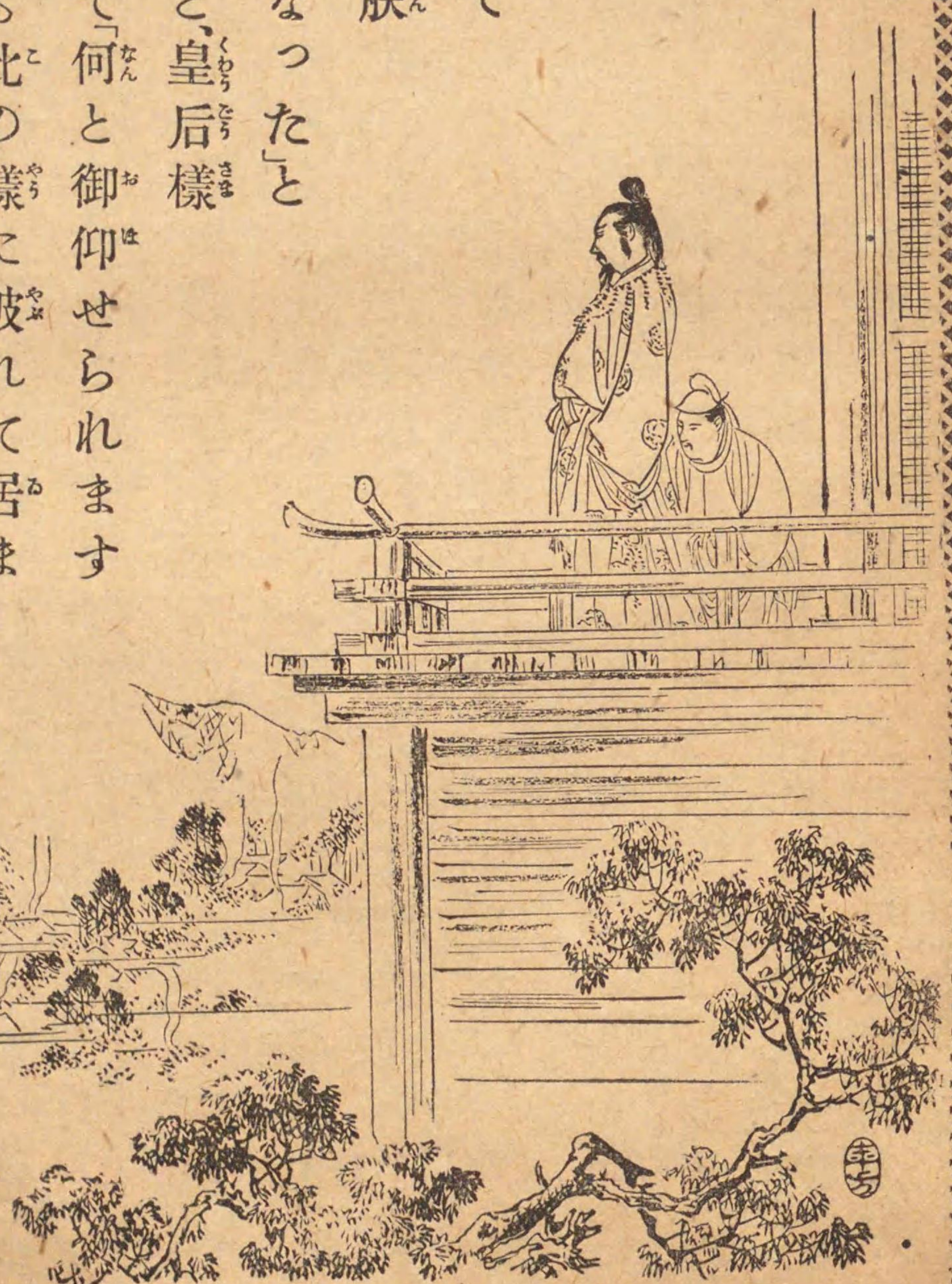
これからは譬へ太陽が西から出て鴨緑江が逆に流れても貢物を奉り決して日本國に叛く様なことは致しませんと申しますゆゑ皇后は御許しになり大矢田宿禰を殘して守らせ御凱旋になりました其の後に三韓から我國に學者が渡つて来て學問を傳へたり種々の職業が渡つて益々文明になりましたこれは皆皇后の御功績であり

ます。

六 仁徳天皇

第十七代仁徳天皇様は應神天皇様の御子様であります、大和國高津宮に居らつしやいました時、御殿の高臺に上つて四方を御覽になりますと、人民の家々から立ち登る烟が至つて細々ですから、之れは屹度百姓共が貧乏をして居るだらうと思召し、三年の間、年貢の取立てを御止めになりました、三年の間少しも租税を納めませんものですから、百姓共は大へんに富有になりました、た代りに、天子様の御住になる御殿は、破れて雨さへ漏り、御衣は裂けて御體さへ表はになると云ふ有様ですが、そんなことには御氣を止められません、さて三年の後に天子様は、再び例の高臺

に登つて四方の様子を御覽になると、今度は烟が盛に立昇つて居りますので、朕はもう富有になつたと仰せられますと、皇后様は傍に居られて、何と御仰せられます、御殿も御召物も此の様に破れて居ますのに、どうして富有になつたと云はれまするか、と御尋ねになりますと、天

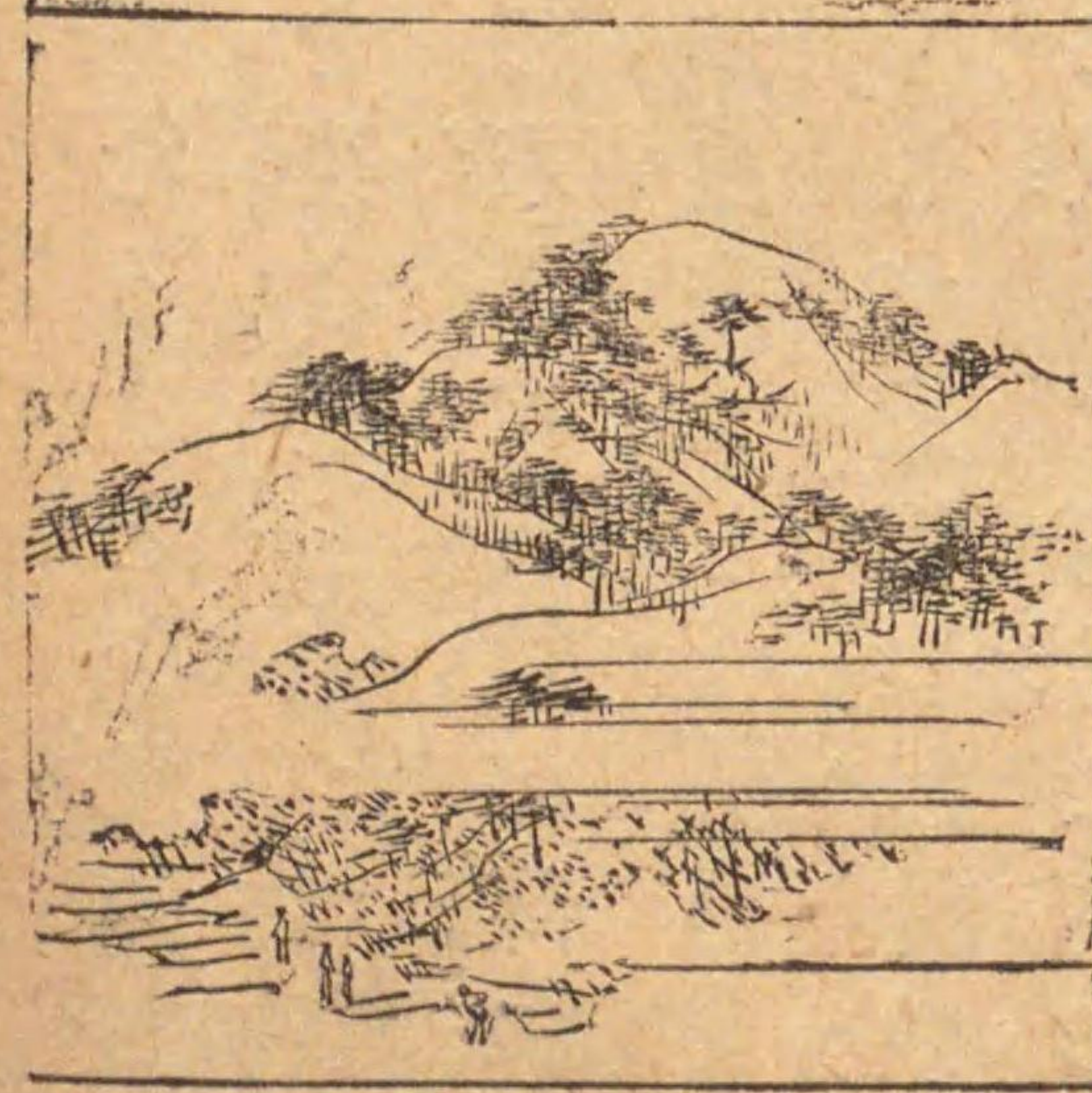
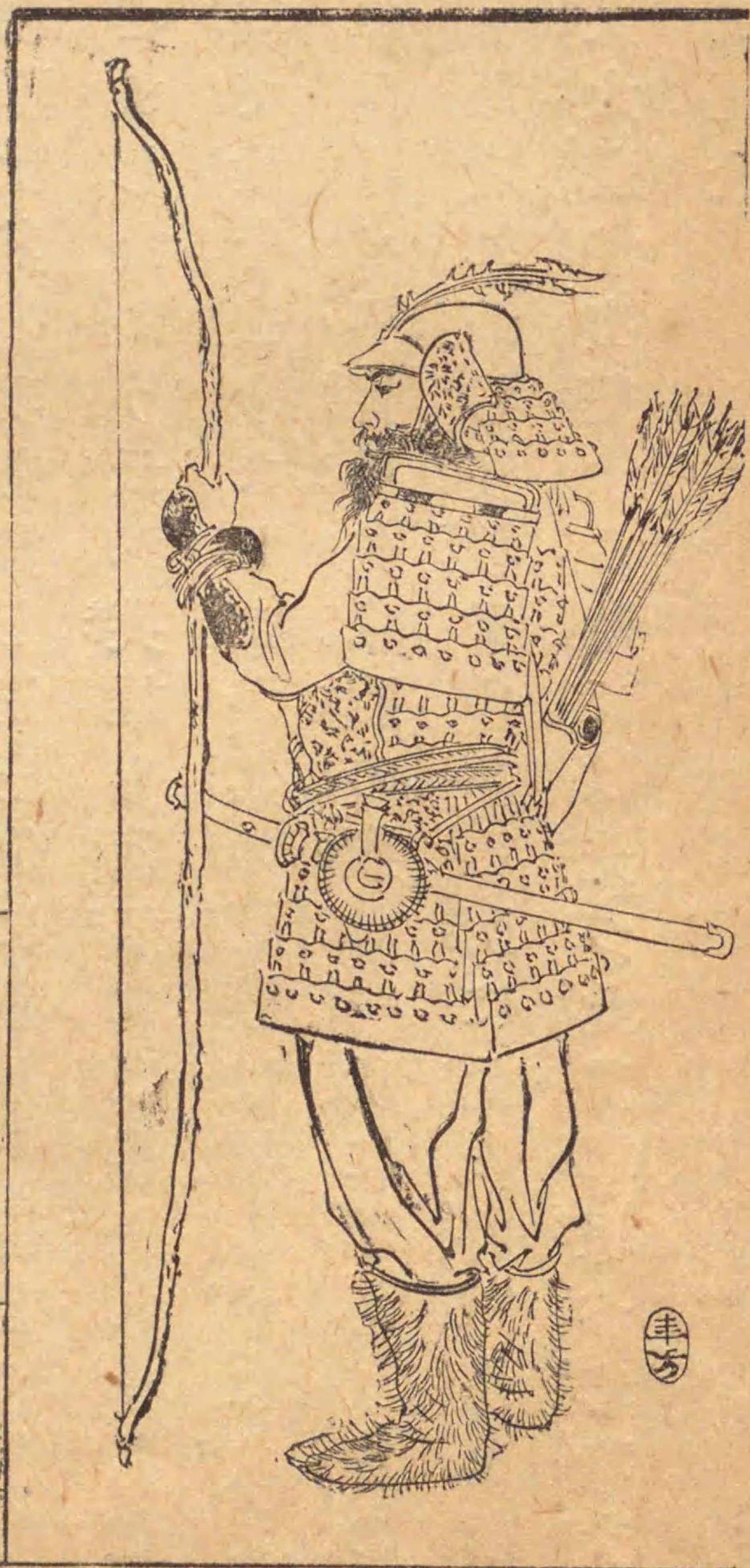


子様は「彼れ見よ百姓共は炊く物が充分であるから盛に煙が立昇つて居るぞ、民百姓が富有になつたのは即ち朕が富有になつたのと同じ事だ」と仰しやいました。これを聞いた百姓共はなんと仁深い天子様でせう、サアこれから御恩返しをしなければならぬとて、吾も吾もと御殿の新築を願ひ出でました所が、容易に御聞濟になりません、尙其の後又三年を経て、はじめて御許しが出ましたから、百姓共は大に喜び、皆々勇み立つて御普請を手傳ひましたから、間もなく立派な御殿が出来上りました。

七 坂上田村麿

怒るときは虎さへすくみ、笑ふ時は赤兒も馴れると云ふ大將は坂上田村麿でありました。此の御方は身の長は五尺八寸、胸の厚

は一尺二寸、眼は鷹の様、で髯は金の針を植えた如くであり、まして、一年中悪者を征伐に出掛けられ、京都に止まつて居られたことは、殆んど無い位でした。或る年、奥州に大熊丸と云ふ豪傑が多く、部下を率ゐて人民を苦めますので、桓



伐なされました。賊は豫てより官軍の征め寄せることを承知して居たものですから、嶮岨な山に堅固な壘を築き、堅く守つて容易に降参致しませんでしたが、激しい合戦の末遂に官軍の謀に陥り、漸くのこととて残らず討平らぐることが出来ました。そこで膽澤城を陸奥に築いて、蝦夷を治めることとして、京都に凱旋致しましたため、朝廷は其の功を賞し、正三位に叙し、大納言に任じ、近衛少將に陞せました。かう云ふ英雄も病氣には勝たれず、弘仁二年に五十四歳で世を去りました。其の死骸は棺の中に立て、平安城の方に向はせ、甲冑弓矢米鹽の類も一所に埋めて都の守りと致しました。之れから後戦争のある度に此の將軍塚が鳴つたさうです。又大將が出征する時には先づ此將軍塚へ参詣することとなりました。

八 中將姫



藤原豊成卿の女に中將姫と申す御方がありました。母は紫の前と云ひ一人の御子でありますから此の上もなく可愛がつて育てますし、此の子が仲々才智に富み孝行の心が深く、其の上容貌が並優れて美しいものです。ですから、父母も寶珠の玉の様に大切に育てて、育てました。處が姫が五歳の時、母の紫の前はふと病氣に罹り、あらゆる

手當を盡しましたが、其の甲斐もなく次第に重くなつて、今は迎ても癒る見込みが立たなくなりました。其の時に母は姫を枕頭に呼んで、妾の命は到底助かる見込みがないが私が無い後に御父様は後妻を娶られても、御前は私だと思つて能く事へねばならぬよと諭して遂に死んでしまひました。姫を始め一家の者は嘆き悲みましたが、最早致方ありませんから、厚く葬式を濟ました。其の後豊成卿は他人の勧めにより、止を得ず照日前と云ふ後妻を娶りました。此の照日前は姫を實の兒の様に可愛がり、姫も實母が臨終の時の教を守つてよく事へました。が、姫が十歳の時後妻は豊磨と云ふ男の兒を生みました。これからは以前とらつて變つて、姫を邪慳にして、豊成卿の留守の時には箸の上げ下しに口汚く叱り付け、生疵の絶えたことがなかつたのですが、

姫は如何なる憂目に逢つても父に知らせたなら、却つて餘計な心配をかけることと思つて我慢に我慢をし、獨で心を痛めて居りました。最早これとて樂みがありませんので、御經を讀むことを習ひ、實の母の位牌の前で、其の御經を讀むのを何よりの樂みとして居りました。然るに鬼の様な照日前は嘉平太と云ふ悪者に頼んで、姫を草鼻峠へ盗み出さして殺させようと致しました。姫は嘉平太に向ひ、私は逆も助かる身ではないから臨終の際にせめて今一度御經を誦みたいから、暫くの間待つて呉れと頼んで、一心に御經を誦んで居られると、流石の悪人の嘉平太も其の心の優いのに感じて、心をサラリと入れ變へ、これより姫を雲雀山と云ふ己が住家に連れて行つて、人知れず匿し置き、照日前には姫の片袖を持って行き、殺した風にして置きました。が、其の後豊

成卿が雲雀山へ狩に行かれた時、姫に邂逅ひ計らず事の仔細を聞いて、始めて其の真相を知り驚いて姫を連れ歸りましたから、照日前は家に居ても心が責めるものですから、實家へ逃げて歸り狂死を致しました。姫は世を果敢なく思ひ、無理に父に願つて當麻寺に入りて尼となり、蓮の絲で蔓陀羅を織り、多くの人から敬はれました。

九 渡邊綱

源頼光の臣に四天王とて、四人の英雄が居りました。渡邊綱は其の一人であります。此の頃は京都の市中に妖いものが出るといつて、女や小供は夜等は外出をしないで、皆恐れて居りましたが、未だ此の妖怪を退治する程の者はなく、丹波の大江山から京都

の北の方へかけて誠に物騒なことであると云ふことを聞いた綱は、如何にかして退治したいと思つて居ますと、或る夜のこと頼光から一條大宮まで、使者に行くことを命ぜられましたゆゑ、馬に誇り一條堀川の戻橋まで來る



と、一人の若い姫に出逢ひました。其の女は妾は五條に住むもので

すが今用事を済ませて家に歸るのでございませす、此頃餘り恐ろしい噂ばかり聞くの



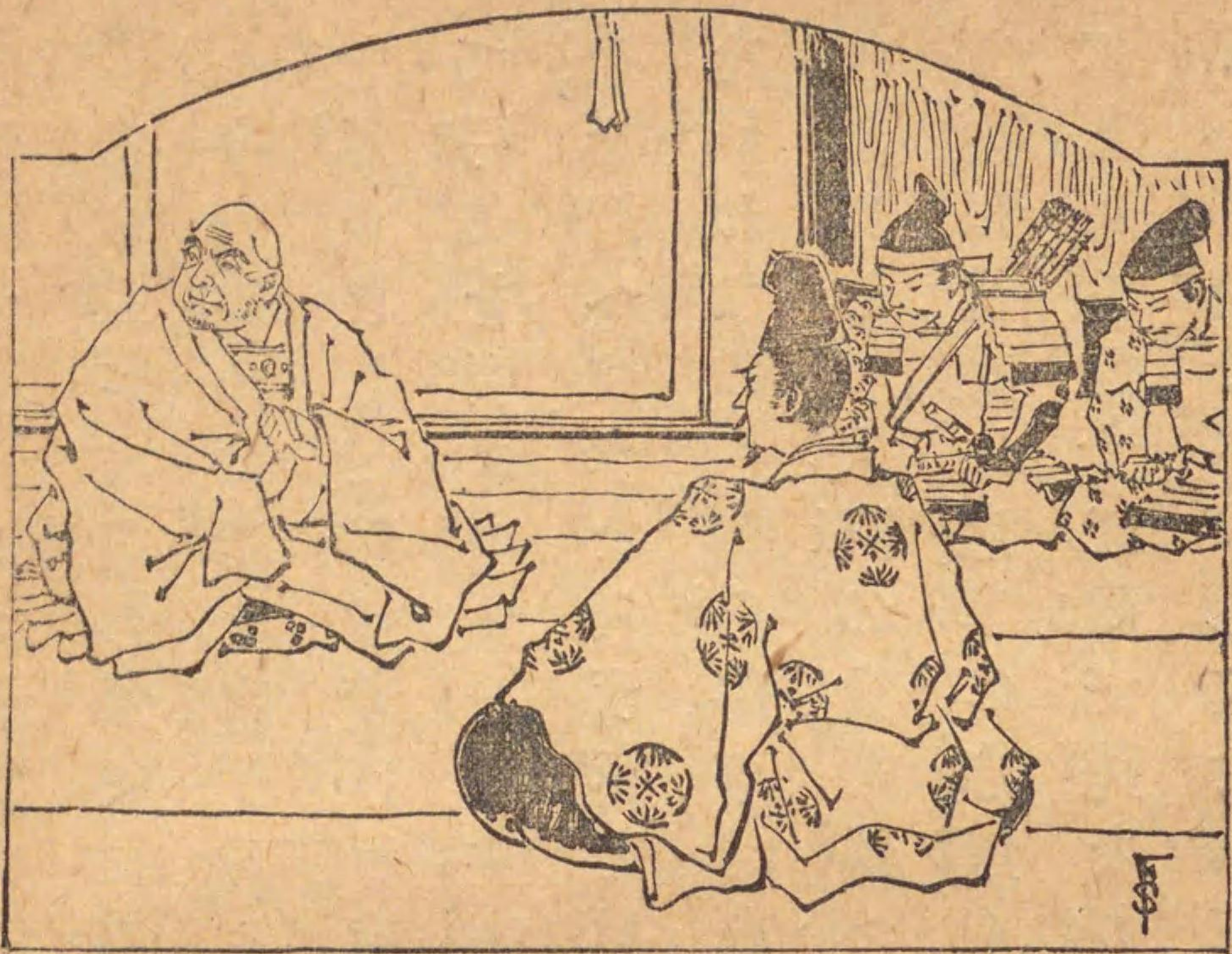
で一人道はこはうございませぬ、何うか宿まで送つて下さるまいか」と云ひますから、綱は「よしよし御前の云ふ通り送つてやらう」と自分は馬から下り、女を乗せて参りますと、女はまた「五條に住んで居ると申しましたが、實は都から少々隔れた片田舎に居るので、御氣毒ですが、其處まで送つて下さい」と申しますから、綱は「是は怪しい油断はならぬと思ひましたゆゑ、何處なりとも汝の住居まで送つてやる、少しも遠慮をすることはないぞ」と云ひますと、妖怪は悟られたと思つたのでせうか、今まで花の様に美しかった姫が急に恐ろしい鬼の姿となつて、馬の上から綱の髻をグツト攪み、「我は愛宕に住むものぞ」と云ひながら、宙に吊るして空を飛び出しました、流石剛勇なる綱もこれはとばかり驚きました、が躊躇しては居られませぬ、刀を引き抜いて、鬼女の

二の腕から斬りはなしますと、自分は北野天満宮の屋根へドゥとばかり落ちました、捕逃したのは口惜しいと思ひながら、頼光に有つた話をなし、其の切取つた腕を見ますと、煤の様な眞黒の膚に銀の針の様な白髪が生へて居ました、皆々大に驚いて、安部晴明に卜占をさせますと、「これは鬼の手である、今日から七日の間は齋をして誰にも會はず身を慎んで居るがよい」と云ひますから、綱は云はれた通りにして家に居りますと、或る晩綱の養母だと欺いて参り、折角切取つた腕を持って逃げられてしまひました、併し是からは再び京都市中へ妖しい者が現はれなかつたさうです。

一〇 平重盛

今から凡そ七百五十年程前高倉天皇様の御代に藤原成親等が平家の専横を怨んで之れを仆さうと計りました處が此の謀が洩れて御刑に遭ひましたか、清盛は箇様な事が起るのは畢竟後白河法皇様の思召である故、どうかして法皇を押籠め參らせんと兵士を集め、自も鎧をつけて今にも押出さうと致しました所へ、人の知らせで子の重盛が大急ぎで馳て來ました、見ると馬には鞍身には甲冑一族の者は皆出陣の用意が出來て居ります、重盛は其の中を烏帽子直衣で通りますと、弟宗盛が其の袖をとらへて「兄上今は大事です父上始め皆鎧を着けて居りますのにその御姿は何事です」と申しますと、重盛はハツタと睨み「御前等は何故に甲冑を着するぞ又敵は何處に居る、我は苟も大臣大將である、賊若し禁裏を犯せば兎も角、さもなくば何とて鎧を着るべ

きぞ」と叱り附けました、遙に之を聞いて居りました清盛は急で



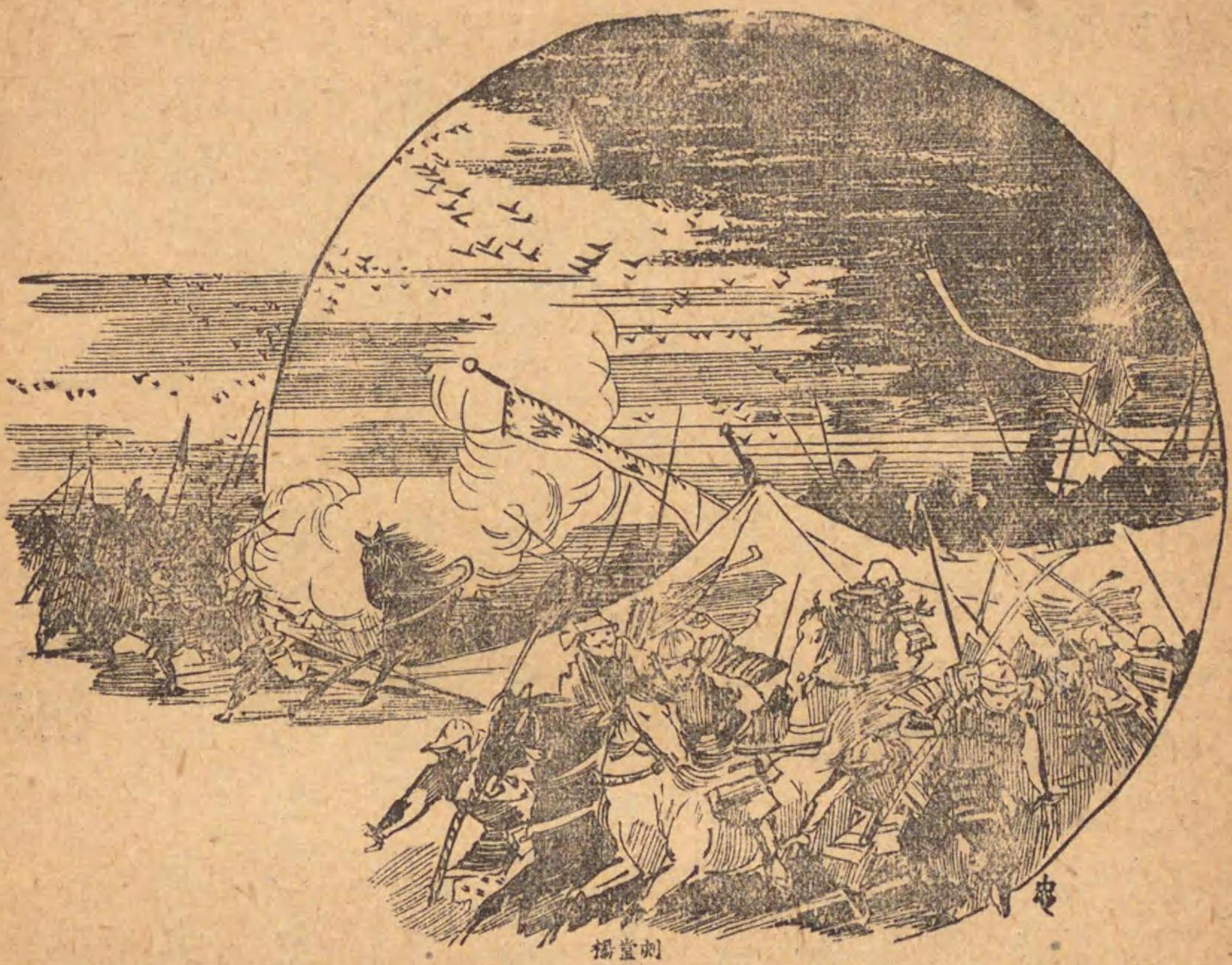
側にあつた法衣を纏つて知らぬ風をして居りましたが、重盛は父の前に兩手をつきハラ／＼と涙を流し「父上の御顔を拜しまするに、最早我が家運の末を現はして居られます、凡そ人間と生れては親の恩師の恩國の恩君の恩の四の恩があると承りますが、其の内君の恩が第一に重いと思はれます、我等臣下の身分にて父は太

政大臣となられ不肖は大い大臣大將に進み、此上もない榮華を極め

て居りますによつて、實に君の恩は海よりも深い次第であります、故に却つて君の爲めに身を捨てるのが武臣の慣であるのに、一身の爲めに君を害することが出来ませうか、若し父上が此事を思止まらせ給はずば、私は今から禁裏へ馳せ参り父上に向つて弓矢を引き申すとも、主上を御衛り申す決心であります、嗚呼忠を思へば孝ならず、孝を思へば忠立たず、願くば父上重盛の首を刎ねてのち御出陣下されと泣くく諫めましたら、流石傲慢無禮にして人臣の分を辨へない清盛も漸く思ひ止まりました、重盛は箇様に忠孝の志厚く、智勇兼備の名將でありましたが、父に先だち四十二歳で薨なりました。其の後平氏の家運は次第に衰へ數年ならずして亡びてしまひました。

一一 源頼朝

源頼朝は義朝の長子であります、平治の亂に父子散々になり、遂に平氏の爲めに捕へられました、幸ふじて命が助かり伊豆へ流されて、伊東祐親の家に居りましたところ、祐親は清盛の命により頼朝を殺さうとして居ることを悟りましたゆゑ、陰に北條時政の所へ逃げて行きました。其のうち仁王から平家を亡す爲めの軍を起せといふ令旨が出ましたゆゑ、此の時である、と勇み立ち、時政の助けにより兵を擧げ直に石橋山に陣を構へました、平家の大将大庭景親の爲めに敗を取り、山の上へ逃げ、樹の空隙にかくれて、危い命が助かりました、進んで箱根山まで参りましたところが、八幡太郎以來深く源氏の恩を受けて居た



關東の武士が、我も我もと味方につき、次第に勢が盛になつたものですから、清盛は非常に驚いて孫の維盛を大將として、二十萬の大兵を差向けて討たせました。源平の兩軍は駿河の富士河を中にし、陣を取り、今にも大戦争が起らうとした。或る晩、平氏の軍勢は水禽の羽音に肝を潰し、驚き狼狽して逃げて歸つてしまひました。頼朝はこれ

幸ひだと弟の範頼と義経等に後から追ひかけさせて、遂に京都まで征め寄せますと平家は兵庫の福原城へ逃げ延びてしまひました。此時早や清盛は薨じた後で、智慧の足りない將士共ばかりでしたから、續いて征められた源氏の爲に、遂に長門壇浦まで追ひまくられ、憐れや平氏の一族は、海中の藻屑となつてしまひました。

そこで頼朝は鎌倉に幕府を建て、征夷大將軍に任ぜられ、天下の政治を御預りすることになり、侍所・公文所・問注所等の役所を置き、漸く無事太平に治まることになりました。

一二 新田義貞

新田義貞は上野國の人で、八幡太郎義家の後裔であります。北條

高時の横暴を悪み君の御心を安じ奉らんと、軍勢二萬餘人を率ゐて武藏國に入り、一晝夜に六十五度の戦争をして、やがて目ざす所の鎌倉へと押寄せました。極樂寺坂へ参りますと、賊は嚴重に固めて居ます。よつて止むを得ず、海を渡つて征めやうと南



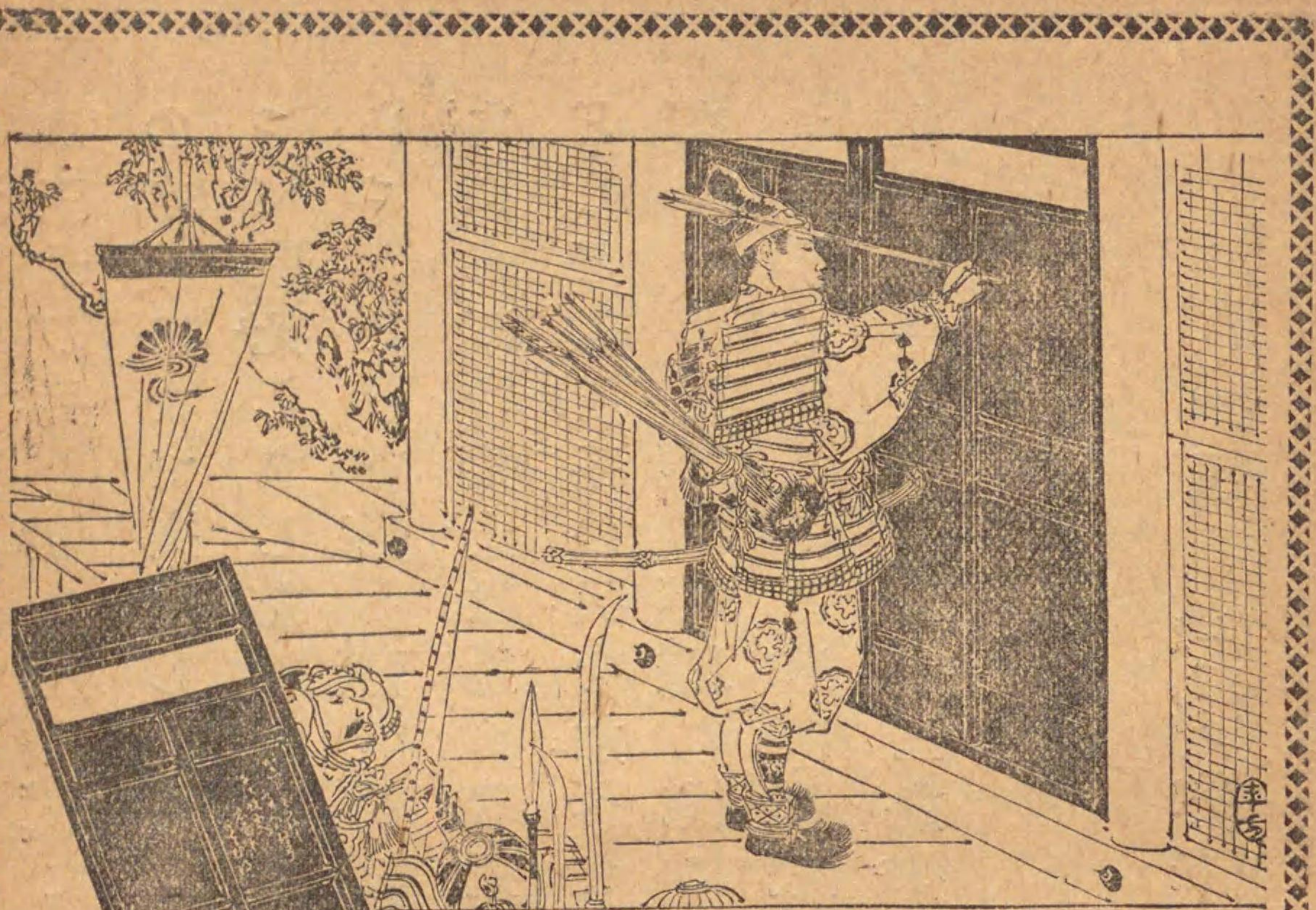
に廻りますと、折しも潮が満ちて居て如何とも致し様がありません。したから、義貞は稻村崎の鼻に突立ち腰にさして居た黄金作りの軍刀を頭高に捧げ、胃を脱いで龍神に向ひ、「今や天皇

は逆賊高時の爲めに苦められ遠く西海に移さる。臣義貞茲に一身を君に捧げて御心を安んじ奉らんとす。仰ぎ願くば臣の志を掬み潮を萬里の外に退けて道を通ぜよ」と聲高らかに祈つて其太刀を投げ込みますと、不思議にも今まで満々と寄せて居た潮はスット一時に引いて砂地になりましたので、臣共を勵まして高時の邸へ討入り、所々に火を放ちましたゆゑ、賊は散々に打ち負け、一族残らず葛西谷に遁れて自殺してしまひました。その功に依つて義貞は左馬頭と云ふ役を賜はりました。續て足利尊氏が叛きましたによつて、楠木正成と共に兵庫へ進み、尊氏の軍と大に戦ひましたが、正成が戦死した爲めに、一旦京都へ還りました。その後弟の義助と力を合せ、尊良親王を奉じて越前に趣き、金崎城や杣山城に立籠り奇計を運らして賊軍を苦しめました。

武運拙なく藤島の戦の時に僅かに五十人の兵を率ゐて三百餘人の敵に對し花々しき合戦を致しました。残念にも義貞は此の戦争中流矢に中つて死んでしまひました。時に年は三十八歳、越前の藤島神社は公の忠魂を祠つた所であります。

一三 楠木正行

攝津國の櫻井驛で御父様の正成公から細々と行末の事を諭されて、不本意ながら河内國へ歸りました。正行は間もなく、お父様が討死遊されたと承つては、唯もう悲しくて悲しくて堪えられませんが、一人竊に佛間に入つて、自害をしようと思つて、父の片身の短刀を引き抜いて、腹をかききらうと致しました。所を御母様に止められ、それからは一心不亂に學問を勉強し、武藝の御

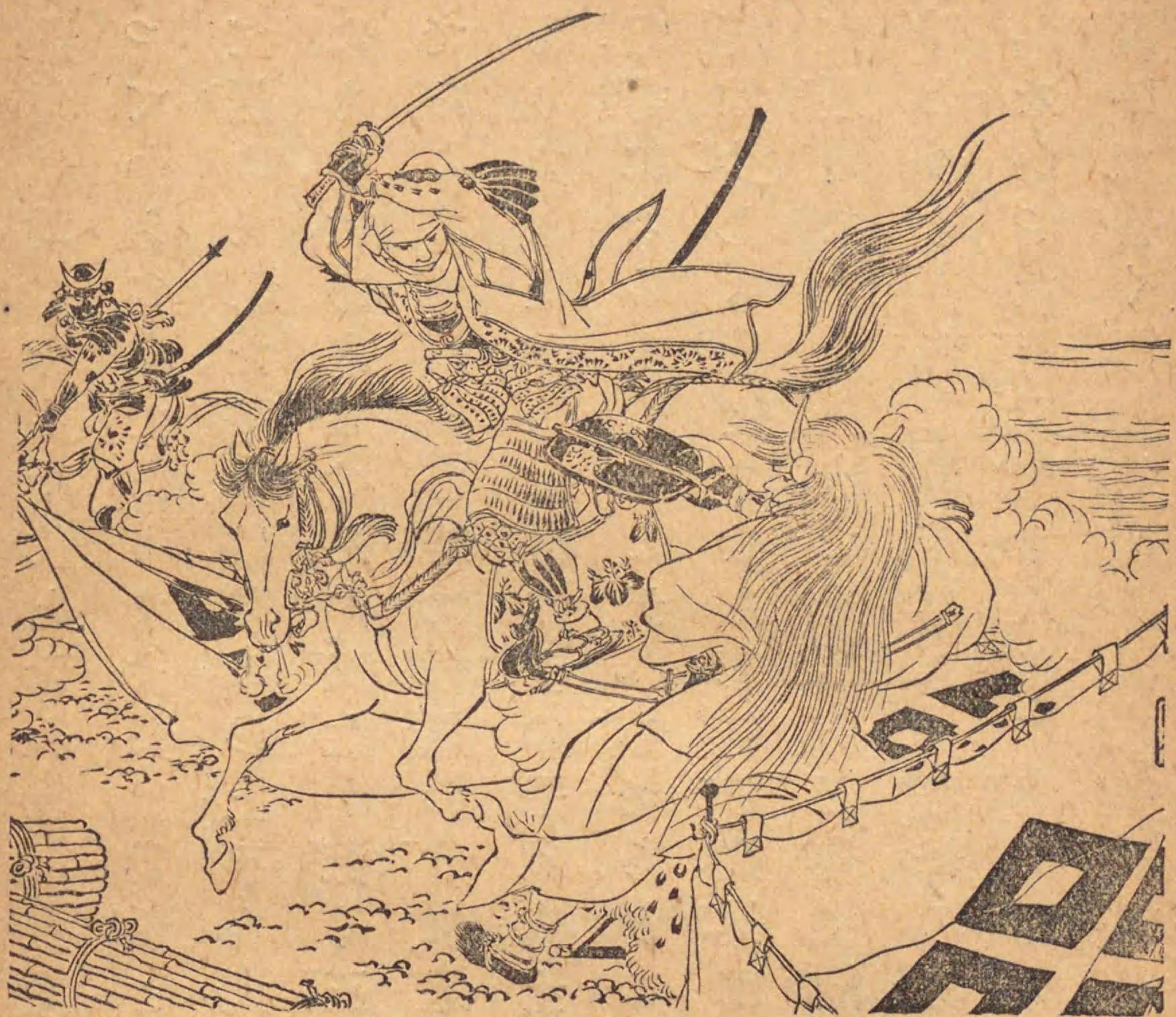


稽古に心をゆだねました。十五歳の時には、吉野の行宮に參内して、皇居を御護り申し上げ、二十三歳の時には、河内の金剛山に立ち籠つて、忠義の旗を翻へしました。譽田林の戦では、朝敵尊氏の兵を伐ち破り、其の勢を以て京都へ攻め入らうと致しました。尊氏は大に之れを懼れて、高師直師泰を大將とし、八萬の大兵を以て攻め寄せました。正行は僅

か三千の兵を以て、四條畷に邀へて大に之れを破り、首尾よく敵の本陣にまで突進しますると、卑怯にも上山高元が師直だといつて戦死しましたから、正行は一時氣を安めました。其偽りであつたことを覺り、再び戦を交へ、都合三十餘度までも渡り合ふ内に、部下の兵士は悉く戦死しましたのに、賊軍は之れに反して、どしどし新手の兵を加へますので、最早如何ともすることが出来ません。正行は針鼠の様に矢を刺され、刀傷さへ澤山受けたので、最早是れまでと思ひ、弟正時と交刺へて、潔く戦死を遂げました。時に年は僅に二十三歳。御村上天皇様の正平四年正月六日のことでありました。

一四 上杉謙信

謙信は幼名を虎千代と云ひ、後に景虎と改め、謙信は後に髪を剃つてからの名であります。父は爲景と云つて、越後國を領分として居りました。謙信は戦争の上手な大將であつたことは、誰知らぬものはありませんが、又仁が深く正しい道を行つた眞の英雄であります。八歳の時に、栃尾の寺に遣られて、僧侶となることであります。謙信は武士の子は武士になるが、當然だ、何んで僧侶等になるものかと云ふ心でありましたから、寺に居つても御經は少しも覺えませんし、毎日亂暴ばかりして、坊主共を困らして居りました。故、寺でも殆んど持て餘して居ましたが、十三歳の時と、うゝ寺を逃げ出して、乳母の家を頼り、武藝の稽古に餘念がなかつた時、天文十八年に父が死なれましたにより、其の後を嗣いで善く國を治め、其の威勢は旭の昇る様でありましたから、



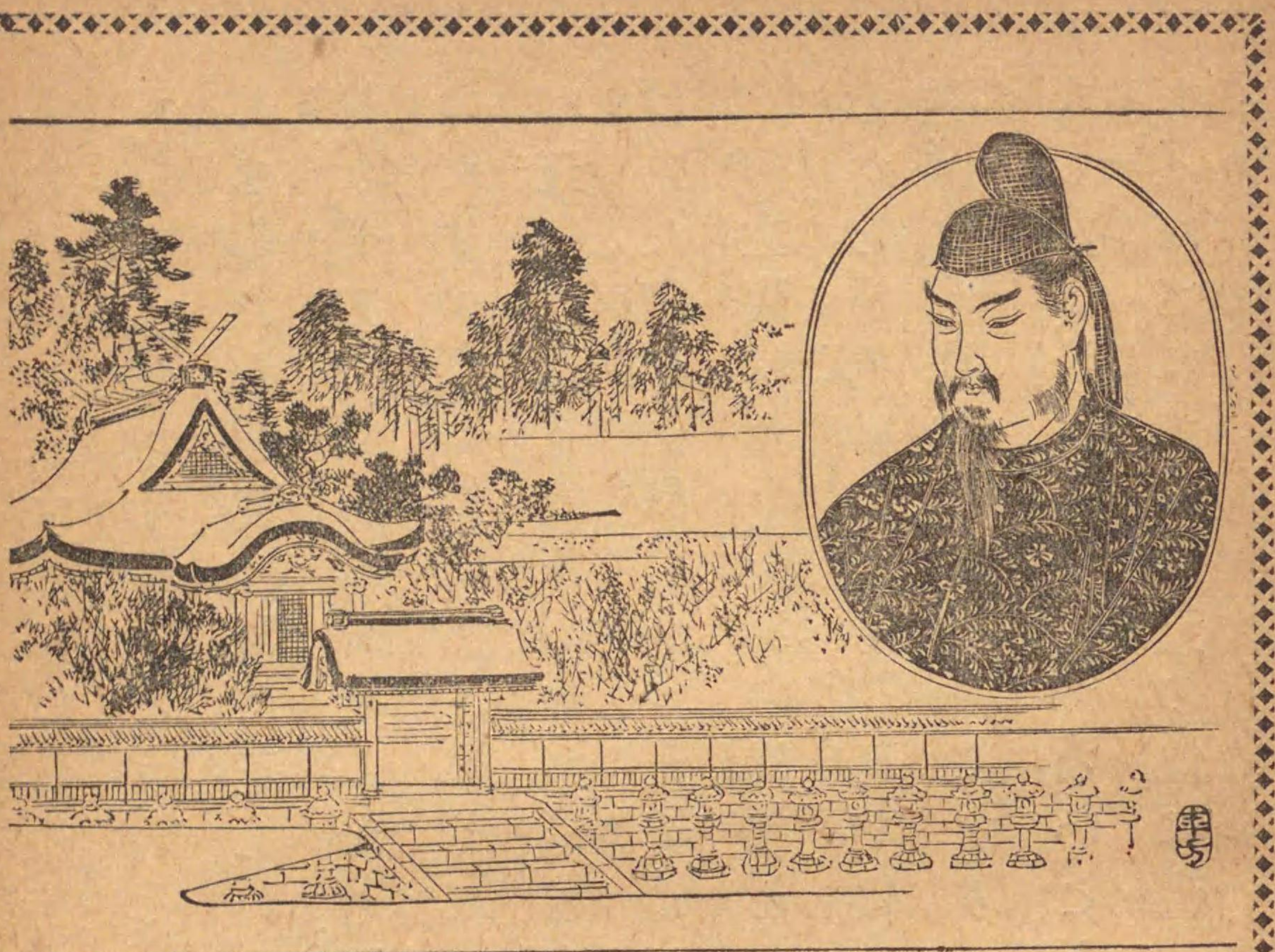
畏くも朝廷から彈正弼
 に任じ從五位下に叙せ
 られました。或る年のこ
 と信濃國の村上義清が
 甲斐國の武田信玄に攻
 め立てられ大敗をしま
 したによつて、越後國へ
 逃げて來て、どうか助け
 て呉れと頼みましたか
 ら、謙信は快く受合つて
 川中島で花々しい戦争
 をしました。が容易に勝

負がつきません。此の戦争最中に信玄は日頃鹽を買ひ入れて居
 る小田原の北條氏と不和をしたものですから、北條氏は信玄を
 苦しめる爲めに鹽を送ることを差止めました。此の事を聞いた
 謙信は鹽がなくては定めし困るだらう。戦は戦、鹽は鹽だ、罪の無
 い人民を苦めるに忍びないと云つて、大に鹽を送つて遣つたさ
 うです。此の川中島戦争が終らない内に、信玄は病氣で死んだも
 のです。から、謙信は非常に落膽して「ア、惜しいことをした。信玄
 の様な豪傑はまたと世にあるまい」と云つて、涙を流して、残念が
 ったさうです。これが眞の日本の武士と申すのでございませう。

一五 菅原道眞

何れの土地にも祠つてある天満宮は、菅原道眞公の英靈の鎮り

給ふ所であります。道眞公の御父様は是善と申す御方で、學者の家柄でありました。道眞は生れつき賢く幼い時から歌を詠み詩を作る事が上手で、都良香といふ人を先生として日夜一心に勉強致しました。或る年の御正月の御祝に良香先生の弟子共が皆集つて種々の遊びを致しました。平常道眞は並優れて學問が出来るによつて今日は他の事で耻をかゝしてやらうと朋友が相談しまして、弓遊びを催しました。道眞の家は代々學者であるから、學問には優れて居るだらうが、武藝は必ず下手であらうと思つて悪企をしたのです。道眞は「弓を射給へ」と友達に勧められました。が、最初は私は覚えがありませんと云つて辭退致しました。が、餘り勧めますので、夫れではやつて見ませうと云つて充分に仕度をなし、弓を引き絞る様子が如何にも古式に叶つて居り



ますから、人々は意外に思ひました。やがて狙ひ違はず的を貫き、外れ矢とては一本もありませんでした。ゆゑ、良香先生を始め感心しない者はありません。却て朋友の悪企が物笑ひとなりました。此の様に小供の時から學問は勿論武藝まで達して居た人でありますから、第五十九代宇多天皇様の時に藏人頭といふ役につかれ、後に參議となり、終に右大臣となられま

した、その頃左大臣には、藤原時平とて年若な亂暴者がありました。道眞の出世を猜み、どうかして陥れてやらうと悪い企みを致しました。が、道眞は誠に正しい人で、決して人に後指をさされる様な御方ではありませぬから、天皇は益々道眞を信用されるものです。ゆゑ、時平は忌々しくてなりませんでした。或る時に時平は天皇に「道眞は叛心がある」と讒言致しましたから、醍醐天皇様は未だ御年が御若かつたものですから、之れを眞實と思ひ大それた御立腹になり、大宰の權帥として、筑紫へ御流しになりました。しかし道眞は少しも朝廷を恨むことはなく、身を慎んで居られ、御年五十九歳で御薨去になりました。道眞は一度は冤罪を蒙りましたが、後に其の邪でないことが明かになり、天子様も大に後悔遊ばされて直様元の位に直し、村上天皇様の御時、京都の北野

に社を建て、天満天神と崇められました。

一六 徳川家光

徳川三代目の將軍を家光公と申します。幼少の時から非凡の才智があり、殊に勇氣に富んだ御方でありました。未だ小供の時御殿の内に失火がありました。次第に火の手が擴りましたから、皆々外へ立退かねばならぬこととなり、家光は家來に連れられて廊下まで出られましたが、不圖立ち止まつて申さるゝには、父上は御立退になつたかと訊ねられました。ゆゑ、未だ御居間にゐらつしやいます」と申し上げましたら、大それた立腹されて父上が御出ましにならぬ前に何故に我を立退かせるのかと申されたそうです。又或る時御父様の秀忠公が一枚の半紙を御持

ちになつて「さあこれに何か其の方の好きな文字を一つ書いて見よ」と云はれました。すると家光は大層喜んで直に筆を取り上



げ、充分に墨汁を含くませて、筆勢鋭く龍といふ字の草書を書きました。が、餘り大字過ぎたものです。から、最終の點を打つ所がございませんでした。秀忠公は何れに打つかと思つて見て居ますと、家光は平氣で紙の外の疊の上へ向つてドツと打ち込みましたから、秀忠公は手を拍つて御喜びになり、「よくやつた。此の氣でなければ天

下を治める事は出来ぬ」と御褒めになりました。此の御方が將軍職につかれると直に日本國中の大名に登城を命じ、祖父家康、父秀忠は諸君と共に天下を平らげたによつて、朋友として待遇をなされたが、余は諸君の力を藉らずして、將軍職についたのであるから、これよりは臣下の取扱をするぞ。若しこれに不服の者があれば、遠慮なく申出でよ」と云つて、諸大名を服従せしめて、徳川氏二百五十餘年間の基礎を築かれました。

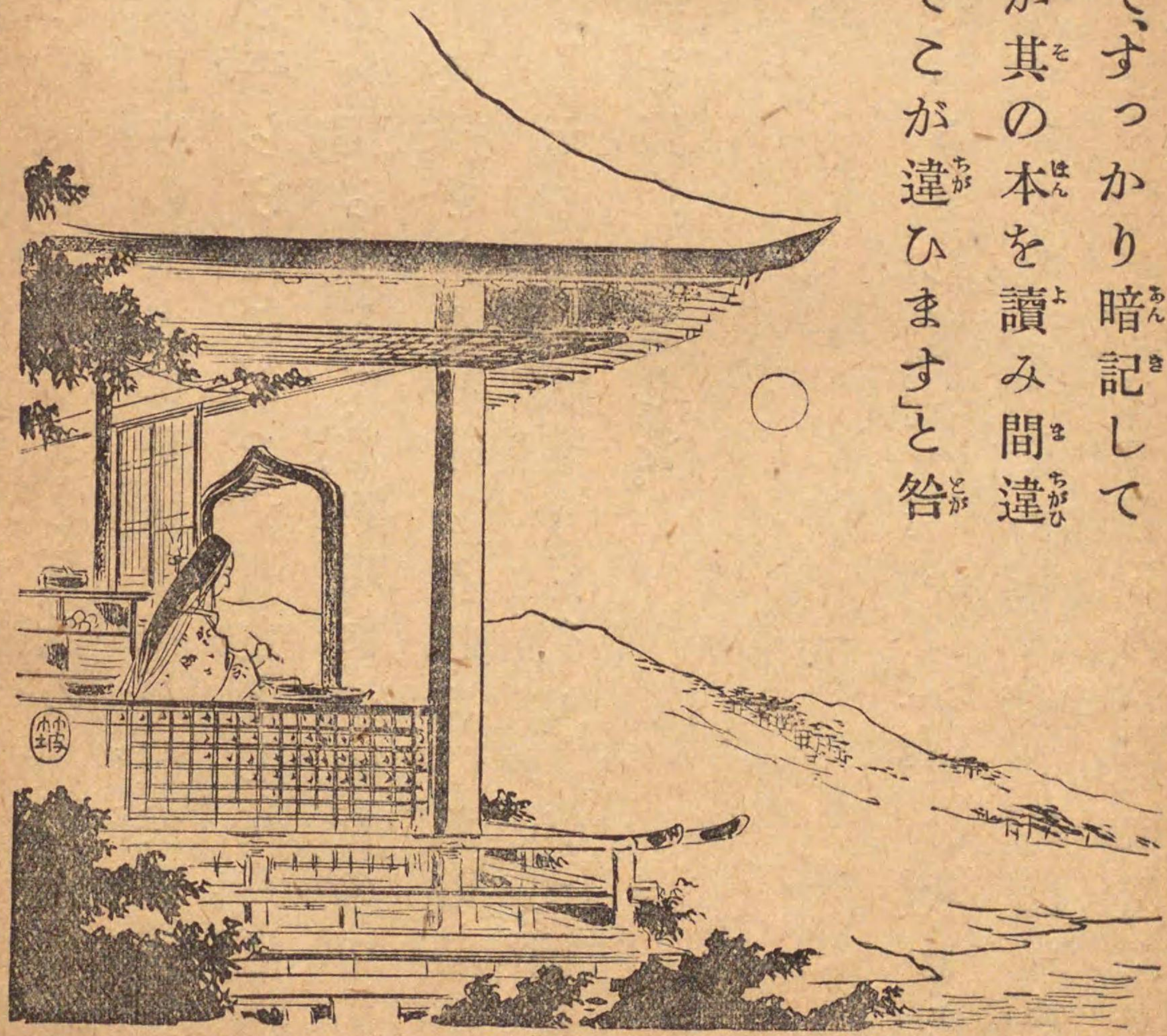
一七

紫式部

紫式部は藤原爲時の女でありまして、幼い時から父母の教をよく守り、並優れて賢い御方でありました。未だ小さい時に兄様が史記といつて、支那のむづかしい本を習つて居るのを、傍に遊んで

居ながら聞き覚えをして、すっかり暗記してしまひまして、時々兄様が其の本を読み間違をする時と傍から兄さんそこが違ひますと咎めて教へたそりです。

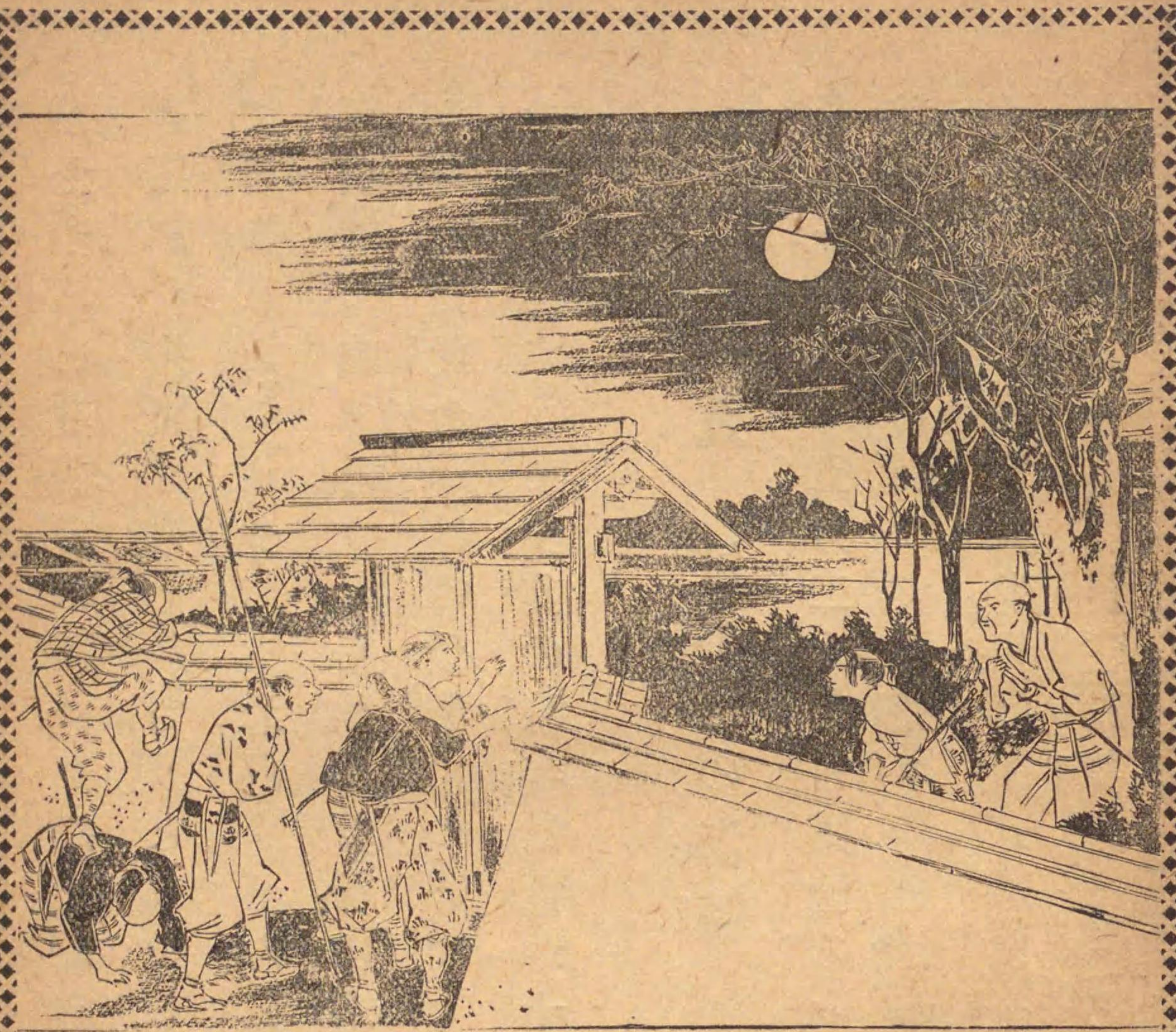
五歳の時には自分で筆を執つて繪や字を上手に書き人を驚かしたさうであります。式部の御父様は屢々嘆いて「此の兒を男兒として持たなかつたのが残念だ」と云はれ



たさうですが、如何にも惜しいことでありました。式部は成長するに従つて、日本の書物は元より支那の書物までも悉く読み盡し、又佛の教までも深く修めました。其内でも殊に和歌と和文とは、最も堪能でありました。此の様に世に珍らしい學者でありながら、性質が柔順でありますから、人に向つては一といふ字さへ知らない風をして居ました。藤原宜孝の家へ嫁入りを致しました。が、不幸にして宜孝は早死を致しましたゆゑ、二度と他へ嫁ぎませんで、御所へ勤めることゝなりましたが、暇がある時は書物を読み、文を作つて樂みとして居ました。源氏物語と云つて文章の鑑といはれる程勝れた書物は、式部の作つたものであります。

一八 中江藤樹

藤樹先生は、今から二百餘年の昔に、近江國小川村の一農家に生
 れました。幼い時から行儀正しく、世間の人等に孝行者孝行者と
 云つて、褒めはやされました。十歳の時から伊豫國大洲の御祖父
 様の元に行つて養育されましたが、或る日のこと、何時ものとは
 り膳に向つた時、箸を採りながら不圖自分は何方の御蔭で三度
 の御飯が食べられたり、温かく衣服を着てゆかれるのだらう、自
 分は少しも働かないで居るのに何に不自由なく養育られて行
 く、之れは皆誰の御恩だらうと暫く考へて居ましたが、第一が君
 の恩、第二が父母の恩、第三が祖父母の恩で、此の三つの恩が茶椀
 の中に盛つてある御飯の粒に宿つて居る。誠に有りがたいこと
 だと思はれました。十一歳の時に始めて大學と云ふ本を讀み、其
 書の中に「天子より庶人にいたるまで、身を修むるを以て本とす



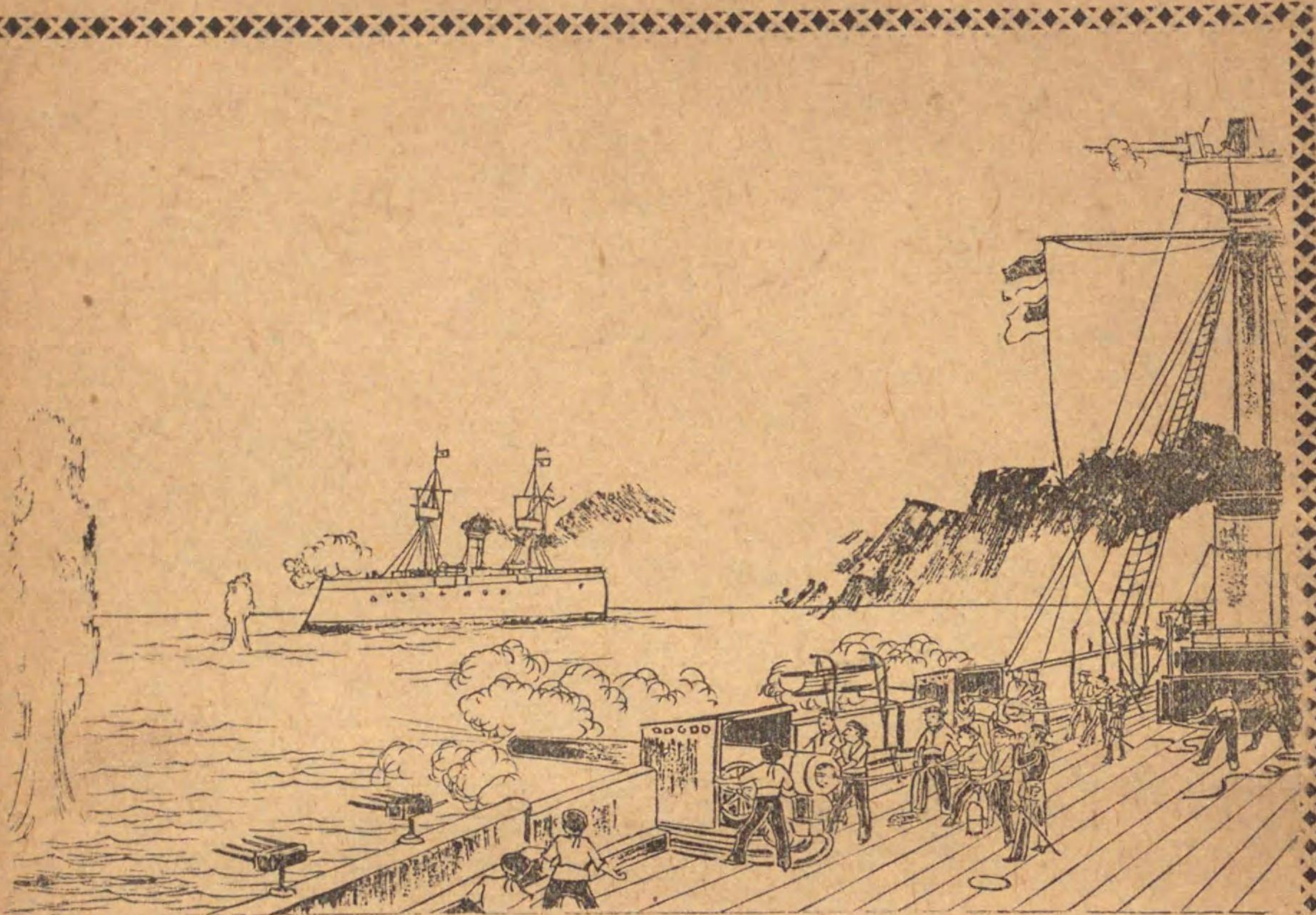
一八 中江藤樹

と云ふ句を讀んで、天子
 様でも人民でも、行を正
 しくするのが本となる
 のだ、自分が眞面目な
 道を踏んで勉強さへす
 れば、屹度勝れた人にな
 ることが出来るものだ
 と深く考へまして、益々
 行を慎まねばならぬと
 覺悟を致しました。或る
 時のこと、祖父様は一人
 の曲者を手討に致しま

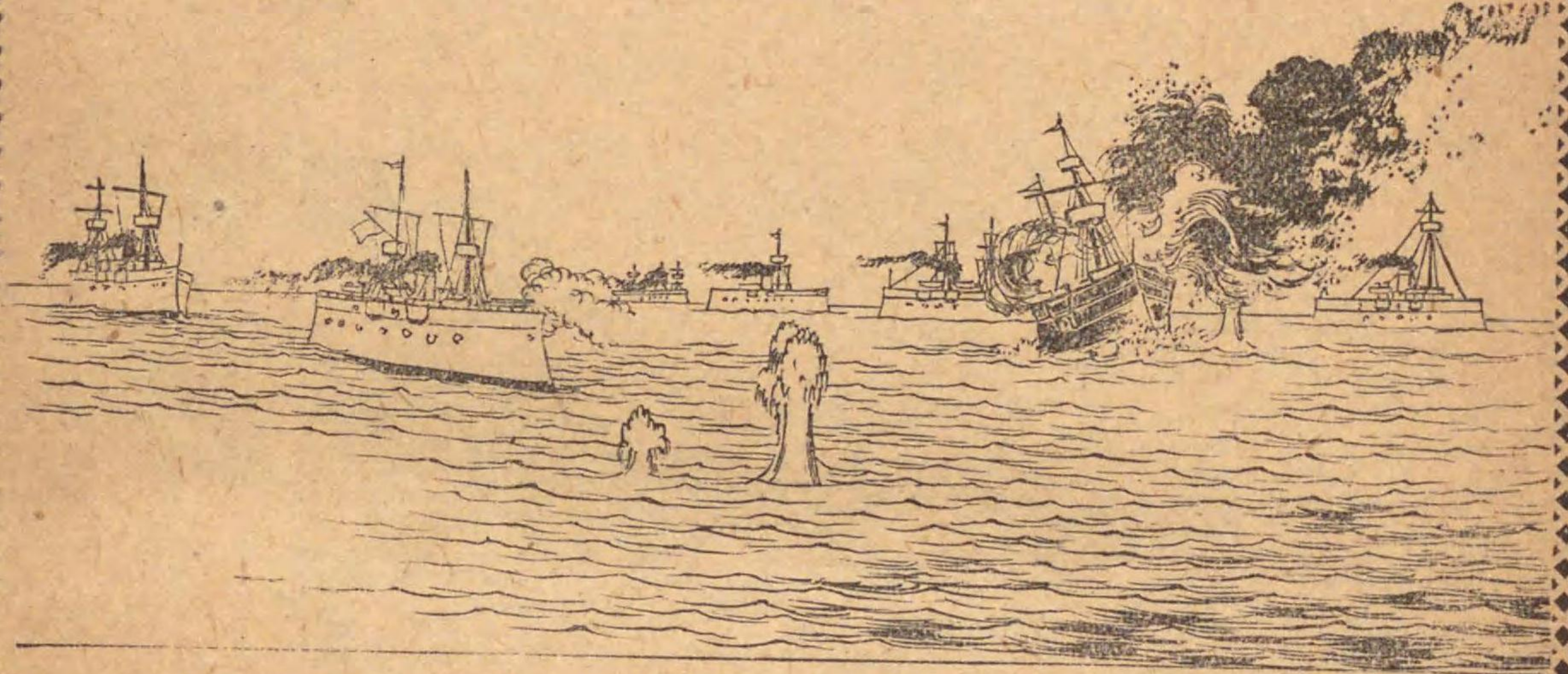
した。すると其曲者の親戚が怨を晴さうと思つて、多勢の者を引き連れて押寄せ、火を放さうとしました。祖父様は豫て覺悟をし居ましたから少しも恐れませぬ。藤樹と一緒に門を開いて突然打つて出ましたから、賊は其勢に愕いて、一目散に逃げてしまひました。此命がけの仕業についても藤樹は少しも後れを取らなかつたさうです。其の時年は僅か十三歳でありました。

一九 日本海海戦

明治三十八年五月二十七日露國のバルチック艦隊は、二十有餘隻長蛇の陣を張つて、浦鹽軍港を目がけ對馬海峽を突進しました。我が司令長官大將東郷平八郎は、全艦隊に向つて「皇國の興廢此の一戦にあり、各員奮勵努力せよ」との信號を下し、此に空前絶



後の大海戦の幕は開かれました。此の日は風強く波荒く、日本海上は殊に暴風雨で、艦の操縦は非常に困難でありました。戦は刻一刻と激しくなりましたが、敵は我の砲撃に堪えないで、二三時間にて早や艦列を亂し、火事を起すものあり、撃沈せらるゝものあり、逃路を遮られて拿捕せらるものあり、遂に敵の司令長官ロゼスト、ウエンスキー提督は白旗を掲げて我に降参を致しまして、茲にバルチ



ツク艦隊は全滅したのであります。天の祐け神の助けによる我が軍は一艦を失はないばかりでなく、些の損害もなかつたことは、世界の歴史あつて以來の大勝であります。彼れの海軍は茲に再び立つことの出来ぬ打撃を受け、陸軍は奉天の大會戦で又たもや敗北して遠くハルビン方面へ退却致しました。此の時に當つて米國の大統領は、世界人道の爲めに此の戦争の仲裁を申し込まれたによ

つて、我國は止を得ず講和を入れることとなり、益々我國の武威が八肱に輝くことゝなりました。

二〇 朝鮮併合

日露戦役が大勝利に終りました結果、韓國を保護する権利は全く我國に屬しましたにより、同國の政治を改良する責任を負はねばならぬことゝなりました。そこで統監と云ふ重い役を置いて、東洋の大政治家と云はれた伊藤博文公が最初此の任に當られ、あちらに御出になつて大に力を盡され、御指導の結果大に政治の改革を計り、其面目を改めました。公の後を嗣いで曾禰子爵が統監となられましたが、須臾にして病魔に冒されて辭職せられましたので、明治四十三年の夏の初めに陸軍大臣子爵寺内正毅

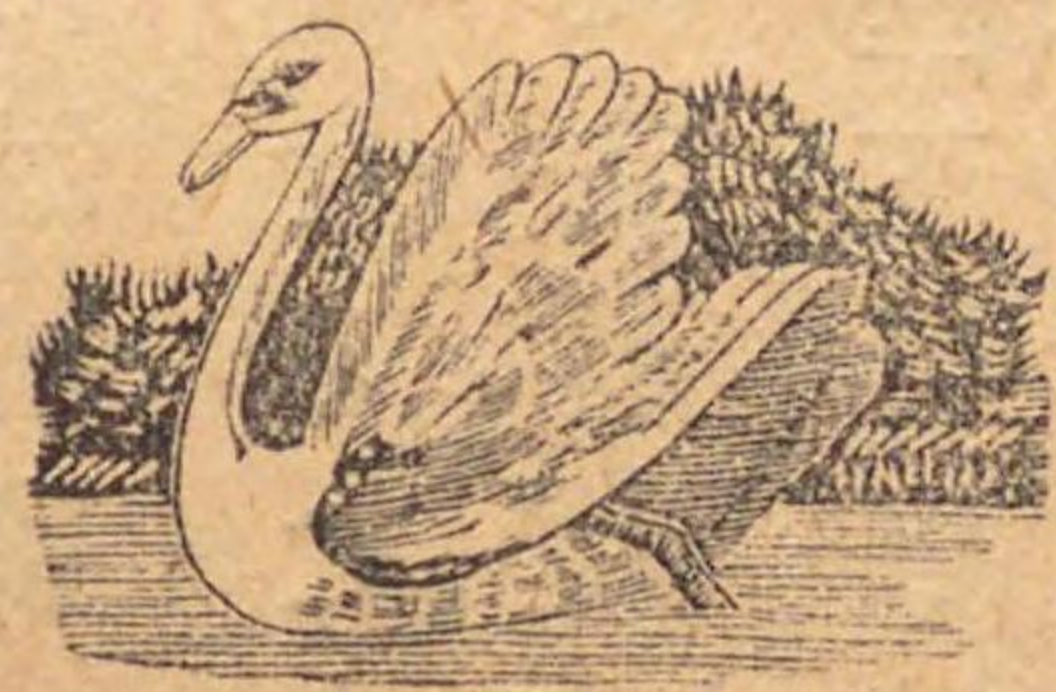


が統監を兼ねられて韓國へ
 趣くことになりました。此
 の時に當つて韓國政府で
 は、到底此のまゝで日本の
 保護を受けて居つたので
 は、容易に完全な國になる
 ことは出来ない、いつその
 こと日本に引き渡し、叡聖
 文武なる日本今上天皇陛下
 の御手にすがつて韓國
 永遠の幸福を願はねばな
 らぬと、韓國皇帝がお考へ

になつて韓國全土を舉げて、我が天皇陛下にお譲り申したいと
 仰せ出されました。そこで陛下は其の願を許されて、韓國を我が
 領土と爲し給ひ、其の名を朝鮮と改めさせ給ひました。此が明治
 四十三年八月二十九日であります。それから、韓國皇帝を王族と
 し、李王殿下と呼び、朝鮮には統監を廢して、朝鮮總督を置き、朝鮮
 國內一切の政治を取扱はせることになりました。
 斯様にして朝鮮は、永久に我が大日本帝國の領土となりました。
 是れ詢に我が今上天皇陛下の御稜威の然らしむる所でありま
 す。如何にも有り難い極みではありませんか。

はまれ(月の巻)終

明治 年 月 日 受賞	名氏導訓持受	名氏長校學
	名氏所住童兒	學 年
		第 學 年



267
643

明治四十五年三月十三日印刷
明治四十五年三月十五日發行

著作權所有

著者 教育研鑽會

發行者 前川一郎
東京市神田區昌平河岸四號地

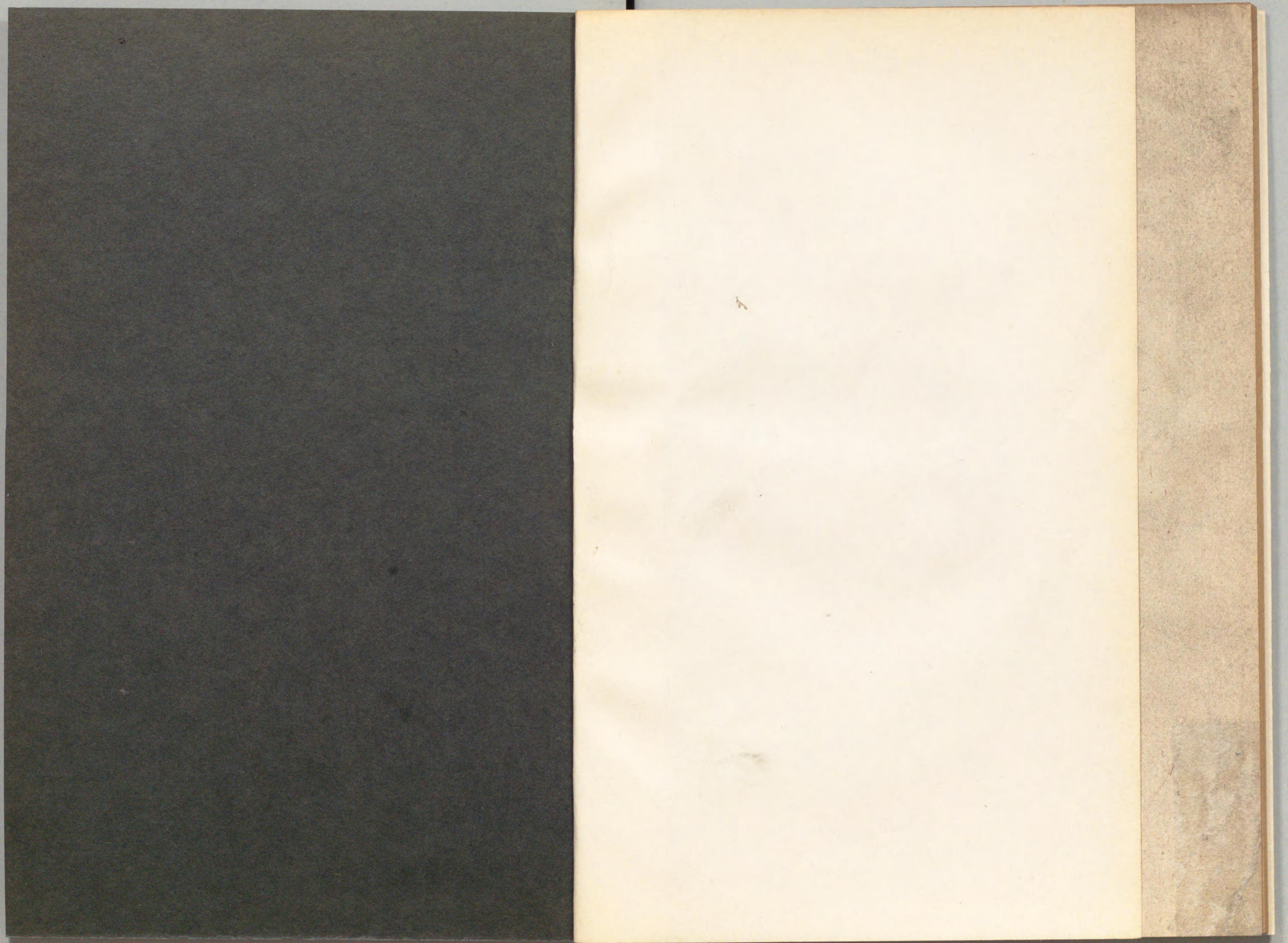
印刷者 橫田五十吉
東京市神田區松下町七番地

印刷所 橫田五十吉
東京市神田區松下町七番地

發行所 東京神田昌平橋 學海指針社

振替貯金口座三〇三三





1554
REC